

# 漆黒のイーグル

アクア＝オプキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この作品は緋弾のアリアの世界観を元に  
オリジナル主人公、ヒロインの物語です。

キンジ、アリアなどは出ません！

俺最強などではないのでご了承下さい。

まずは是非本編をどうぞ。

感想などお待ちしております。

※登場人物紹介をしました。そちらを見てから読んでくださると更に面白いと思います！

更新再開致します。

不定期更新になりそうです。

申し訳ございません。

# 目次

第1話	1
第2話	21
第3話	49
第4話	71
第5話	86
第6話	117
第7話	136
第8話	155
第9話	173
第10話	196
登場人物紹介1	213
第11話	218

1  
3話

1  
2話

254 238

# 第1話

犯罪組織に対抗する為、武力で問題の解決にあたる探偵、通称“武偵”

俺はその学校に通う普通の高校生とは少し違った学生だ。

武偵にはランクがあり、S・A・B・C・D・Eといった順でありSランクだなんて  
そうそうなれるものではない。

その中でも俺は落ちこぼれに分類するランクE

余り良い感じでないが割と俺にあっているかもな。

そんな俺は今は布団の中だ。

「……ちゃん………ちゃんってば！………」

「うっうくん」

「もう！ “双ちゃん”！朝だよ！起きて！」

「あと、五分………」

「起きて！」

「ぐはあ!?!」

突然、腹部に痛みが走る。

「どうやら腹を殴られたらしい。」

「いつてなあ〜もつと普通に起こしてくれよ望海！」

「なら、自分で起きて下さい！ほら！遅刻しちゃうから顔洗って朝ご飯食べて！」

「わっわかつたよ。」

コイツは幼馴染みの篠原望海、しのはらのぞみ 訳があつて一緒に暮らしている。

家事全般は全部まかしている。

「あつそうだ、双ちゃん今日私帰り任務で遅くなるから！」

「了解く流石、Aランク武偵だな。落ちこぼれの俺とは違うわ〜」

「皮肉ばっか言わないの！双ちゃんだつて本気だせばすぐだよ！」

「そうかな、Eランクって事はそういう事だよ。」

「でも双ちゃん」

「ほら、遅刻するんだろ？支度しろつて。」

「うっうん」

「いただきます。」

俺はテーブルに付き朝食を食べる。

朝から煮物か何時から起きてるんだ？望海の奴。

俺の好きな味付けだし。

「ご馳走様」

「はいお粗末様。双ちゃん、防弾ネクタイ曲がつてるよ。」

「おっサンキュー」

望海がネクタイを直してくれる。

「あと、ホルスター?と銃だよ」

「ありがとう。あと、いい加減、装備の名前ぐらい覚えろよ」

「だってゴチャゴチャしてて良く分らないしそれに私は“コレ”の方が好きだし。」

そう言い望海は腰に着けている“日本刀”を見せる。

望海は銃の扱いが一切できないだけではなく装備系の名前と物が一致しない。

よく、Aランクになれたな本当。

「正に武士だな」

「違うよ!皆してすぐそう言う!」

「日本食ばっかだし。」

「オムライス大好きだもん!」

「なら子供だな。」

「違うもん!」

「ほら、その何々だもん正に。」

「いじわる！双ちゃんなんて知らない！事件に捲き込まれても助けてあげない！」

「おいおい、縁起悪い事言うなよってかそこは助けるよ。」

「武偵なら自分でどうにかして！」

「んな事わかってるよ。今日ケーキ買って来てやるから機嫌直せて。」

「本当!?!プリンチーズケーキ忘れないでね！」

「あいよ」

そのケーキ美味しいのかと聞きたかったが面倒だから止めておいた。

〔武偵高〕

「それじゃね双介君」

「ああ、またな」

俺と望海はそれぞれの教室に向かう。

学校じゃ双ちゃんと呼ばない約束だ。

「はよ〜」

教室の中に入る

「ちっEランクかよ」

「どうどうと入ってくるなよ」

「落ちこぼれが」

周りの野次が聞こえる。

まあ、当然ちや当然か。

なんせEランクだからな。

「……………」

無視をし席に着く。

「ソウスケ！おはようネ！」

「おはよう、〃カユウ〃」

コイツの名前は、〃リン・カユウ〃日本人と中国人のハーフで席が隣だ。装備品を売買していてお世話になっている。

「ソウスケ、聞くネ！新しい弾薬が入ったネ！買うネ！」

「こないだ買ったばっかだから無理」

「そんなの聞いてないネ！」

「だろ？なネットを買ったからな。」

「ダメネ！ネットのは当たり外れアルネ！」

「間に合わせで買ったんだよ。」

「イケナイネ！」

などと騒いでると

「ちよつと！朝から五月蠅いんだけど！」

教室に入ってきた一人の女子が言う。

すると、周りの声も静かになる。

「全く……………」

「おはよう『有川』」

「はあ？ 話かけないでくれる？ 落ちこぼれがうつるんですけど？」

「はいはいすまん」

「ふん……………」

すると俺の席の前に座る。

「姫！ おはようネ！」

「だから五月蠅いって言うてんの！」

「ハイハイ、それよりそんなにイライラして生理力？」

「違う！」

カユウと話してる女子の名は有川ありかわ姫ひめこのクラスの中心的人物でAランクの武偵。

このクラスは有川に逆らえない。

コイツも一般で入ってきた一人、ちなみに同じ中学だった。

Fカッブらしい

「何!? いやしい目で見ないでくれる?」

「みてねえよ」

「姫短気ネ、カルシウム足りテルカ!」

「足りてる! つてか五月蠅いつて!」

「それより聞くネ! ソウスケがネットで弾薬を買ったネ!」

「はあ? 私に関係ないし落ちこぼれが何をしようか知らないんだけど?」

「姫は冷たいネ!」

「何でそうなるのさ!?!」

「これだからギヤルはダメネ。」

「ギヤル関係ないでしょ!?!」

「ヤレヤレネ!」

「はあ……………弾薬ぐらいきちんとしたの買えば…」

「おっ! ツンデレネ!」

「違うつつうの!」

「放課後」

「ふあく眠い」

訓練が終わった俺は帰る支度をし外に出た。

「ソウスケ！待つネ！工房によつてくネ！」

「大丈夫だから任務あるしまたな！」

「チョー！ソウスケ！」

逃げるように走つて行く。

説教されるのは御免だからな。

「せめてメンテだけでも……………逃げ足速いのね。大丈夫かしら。」

「はあっはあっささと迷子の猫探しでもしますか」

今日の俺の任務は迷子の猫探しだ。

Eランクの任務はこういうのが多いでも俺はそれが良いと思っている。

落ちこぼれでも役にたてるし尚且つランクが高い武偵だとまず受けない。なぜなら、報酬が少ないしランクが高い武偵はそれなりの報酬がかかる。現に俺も望海の報酬で生活がなりたっている。

俺なんてせいぜい弾薬代を稼げるぐらいだし。

「サファリアちゃん〜どこかな〜」

30代主婦からの依頼でオスのシヤム猫のサファリアちゃん。

部屋の掃除中に窓から脱走したらしい。

居なくなつて半月搜索も打ち切りになつてしまった。

なので武偵に依頼を出した。

大切な家族何だ、絶対に見つけてみせる。

俺は今河川敷の下に居る。

そこで似たような猫の目撃情報があつたからだ。

「居たー!」

間違いない写真と全く一緒だ!

それに首輪も同じだ。

「ほら、怖くないよ、おいで。」

「にやーん」

少しすり傷があるが、元気そうだ。

「君のママが心配してたぞーお家に帰ろうな」

「にやあ！」

「はは、つ、良い返事だ」

「本当にありがとうございます！」

「いえいえ、無事に届けられて良かったです。」

「せめてお茶とかでもっ！」

「報酬もいただきましたし大丈夫ですよ。」

「でもっ！」

「また何かあったら依頼を出してくれば大丈夫ですから！」

「本当にありがとうございます！ほら、サファリアもお兄さんにお礼言っ！」

「にややあ♪」

「それでは奥様、戸締りしつかりですよ！」

「はい！いつでも遊びにいらして下さいね！」

「ええいつか必ず」

ふう一件落着

「さてと望海のケーキ買って帰らないと！」

いつものケーキ屋が閉まるまであと、一時間か。

「少し急ぐか」

〔商店街〕

「ふうく残り10分って事か……………ん？」

何やら周りが騒がしいぞ。

あれは銀行からか

「これ以上来るな！コイツがどうなっても良いのか!!!」

「ひっ……お巡りさん…助けて…」

「どうします？これ以上近くとあの犯人本当に人質刺しますよ？」

「くっ………総員！一旦下がれ！」

包囲していた警察達が下る。

どうやら銀行の入口で事件は起きてるみたいだ。

まづいな犯人は酷く昂奮状態だ。

放つては置けない！

「武偵です！」

俺は近くに居た警察に手帳を見せた。

「Eランク？要請したのはAランクのはず」

「そんな事言ってる場合か！武偵に変わりはないだろ！」

「はあ？お前な歳上に向かって」

「やめろみつともない」

上官らしき人物が言う。

「しっ失礼至しました！“矢島”警部！」

「俺に言わずその武偵に言え!……つたく……下げれ」

「すまん坊主」

「いえ、状況はどうなってます?」

「ふがいないばかりに小一時間程緊迫状態だ。犯人は突然男に

刃物を突き付けこうなったらしい。上層部の奴、何をしぶってるのか

発砲許可がおりず威嚇射撃すらできない。」

「そうなんですな。威嚇射撃か……」

「できそうか坊主?」

「ええ……ただ……まあ俺の獲物は……コイツなので本当に

威嚇射撃しかできそうにないっすね。」

「そう言い俺は腰にぶら下げて居る『デザートイーグル』を見せる。

「そんなもん良く使ってるな」

「ははっですよね。近くの看板に射撃しますので皆さんに伝えて下さい。」

「ああ!」

「警部は無線で状況を伝える。」

「警部、何があっても僕に構わずに!あんまり使い慣れないんで!」

「ああ!任せておけ!」

「行ます!」

<<<ドカアアアアン!>>>

「なっなんだ!」

犯人は驚いて手に握っていたナイフを落す。

「総員!突撃!!!」

警察が一気に犯人を取り押さえる。

「ぐっ?!.....くう!.....」

俺が発砲した後肩に強烈な痛みが走る。

肩を抑え蹲る。

「おい!坊主!」

「ぐうっ.....つあっ.....」

「坊主!しっかりしろ!おい!救急車呼べ!坊主!坊主!」

やべえ猛烈にいてえ意識が遠くなりそう。

「Aランク武偵2名到着しました!あれ?双ちゃん!」

「.....の.....ぞ.....みっ.....」

「肩が変に外れてる！ 姫ちゃん！ 双ちゃんを抑えてて！」

「うっうん！ 板倉！ しっかりしろっ！」

「いくよっ！ せい！」

〱〱〱キツ〱〱〱

「ぐあああああああああ  
！！！！！！」

「暴れるな！ 板倉！」

「双ちゃん！ しっかり！」

「……………くっ……………」

「きやつ……………ちよつと！ 板倉！ 駄目気絶した。」

「双ちゃん……………一体何があつたんですか？ 警部？」

「あつああ坊主に威嚇射撃をしてもらつたんだが撃つた直後こうなつたんだ。」

「威嚇射撃……………まさか!?……………この馬鹿は！」

「え？ 何？ 姫ちゃん!？」

「この馬鹿はネットで買った弾薬を使ってカユウに見てもらわずに発砲したんだよ！」

「うーんと何がいけないの？」

「つまり！ 不良品を使って怪我したって事！」

「きちんとしてれば起こらなかつたの！ 自業自得ってわけ！」

「え？嘘!?もう！双ちゃんの馬鹿!!!!」  
「マジかよ坊主……………そりやないぜ。」

「……………うつ……………うーんと……………ここは?……………病院?」  
「そうです！病院です！」  
「望海?それに有川と警部もどうして?」

「どうしてもこうもありません!!!」

「何そんなに怒ってるんだ?」

「怒ってません! 双ちゃんの馬鹿!」

「はあくそのままくたばれ落ちこぼれ」

「坊主、協力してくれたのは助かったが厄介事増やすなよ。」

え? 何で怒られてるの? 俺?

「双ちゃん! ネットで弾薬買ってカユちゃんに

メンテさせないで銃を使っただって聞きました!」

「え? そうだけど? 何が?」

「ちっ………とつとと死ね落ちこぼれ!」

そう言い残し有川は病室を出る。

「坊主、あんな………不良品を使って暴発気味に発砲して自分で怪我したんだよ。」

「え? マジですか」

「ああマジだ。………つたく後は嬢ちゃんに任せる。はあく始末書かかねえと」

警部も病室を出た。

「えっえーと望海さん?」

「はい! なんですか!」

「すまん! ケーキ買ってない」

「馬鹿!!!」

「病院から叫ぶなよ。」

「もうっ……………心配したんだからっ……………」

「すまん……………」

「決めました! 双ちゃんを強襲科に転科させます!」

「はあ!?! いやっそれは!」

「文句は一切聞きません! 双ちゃんを強襲で鍛えます!」

そして落ちこぼれなんて言わせません!」

「でもっのぞっ」

「おだまり!」

「いってえ」

デコピンされた。

理不尽

「返事は?」

「イツイエスマム!」

「違う!」

「承知至しました！篠原お嬢様！」

「あつてるけど違う！」

「わかったよ望海」

「よろしい！」

はあく俺の学園生活はどうなる事やら

## 第2話

かくして俺のへまで強襲科に転科する事になってしまった。  
どんな生活が待ち受けてるのやら

〔自宅〕

「いてて…そりや完治はしてないか」

「当たり前だよ！昨日今日で治る怪我じゃないんだから！それより朝ご飯食べてね！私、もう学校にいかないといけないから。」

「わかつてるよ。あれ？望海早いんだな今日は。」

「うん次の任務で色々あってね。あと、双ちゃんの転科の手続きしないとだし。」  
「おっおうそうか気をつけてな。」

「うん、双ちゃんもね！いつてきます！」

そう言い望海は慌ただしく家を出た。

にしても転科は免れないのか。

「俺もそろそろ支度しないと」

防弾制服を着て朝食を食べる。

今日は鯖の味噌煮か本当日本食だな。

手が凝ってとても美味だ。

「にしても武器携帯できないのは心細いな。」

俺のデザートイーグルはカユウに修理してもらってる為、手元がない。

ナイフとかもないので丸腰だ。

まあ、あつてもこの怪我じゃ何もできないか。

「さて、そろそろ行くか」

少し余裕を持って登校するか。

「いってて〜」

「ソウスケ待つネ」

「うわあっ!? 吃驚した〜何だよカユウ」

「失礼ネ、ちよつと工房までよつてくネ! 拒否権はないネ。」

「わっわかった」

間違はなく説教だよな。

トホホ

「カユウの工房」

「さてソウスケ! 何で呼出しされたかわかるか?」

「えつと〜デザートイーグルについての説教つすよね?」

「説教とは失礼ネ!」

「すいやせん」

「はあく双介！アンタ自覚あるの!？」

「カユウ、言葉戻ってるぞ」

「うっさいわね！工房にいる時ぐらい良いじゃない！」

「はっはい」

庄に負けてしまった。

カユウは元々普通に喋れる。

あえて片言で会話してるみたいだ。

俺の他にも知ってる奴はいる、望海とかな。

「双介！聞いているの!？だいたいね！ネットで弾薬買うとか論外よ！

メンテもしないで逃げるし！アンタそれでも武偵なの!？」

「すまん」

「武偵憲章1条！仲間を信じ仲間を助けよ！私の事信じてないの!？」

「いやっ信じてるよカユウ」

「じゃ！何よ!？」

「言い訳すると説教されたくなかった」

「今されてるじゃない！馬鹿！」

「すまんかった」

「何の為の装備科よ！……………心配したんだからね」

「悪かったよカユウ」

「馬鹿双介……………はい、直したわよ」

「ありがとうカユウ」

修理してくれたデザートイーグルを渡される。

「大事な銃なんですよこんな事で修理させないで」

「ああ、気をつけるよ。」

「さて、双介アンタ怪我大丈夫なの？」

「望海が休ませてくれなかったのと『医者』から若いんだからすぐ治るって言われた」

「ああ〜理解できた。無理そうならすぐに言うのよ」

「ああ、そうするよ。」

「なら、学校に行くネ！」

切り替え早いな。

俺とカユウは工房に出て学校へと向かうのだった。

「学校」

「ふう〜着いた」

「近い距離ネ、ソウスケは体力ナイネ。」

「いきなり走るからだろ」

「そうしないと間に合わないネ」

「いやいや！十分間に合ったって」

「そんな事より教室入るネ」

「わかってるよ……………はよう〜」

息を整えて教室に入った。

「おっ！間抜けな落ちこぼれが登校してきたぞ〜」

「お前が事件解決したとか嘘じゃね」

「怪我も仮病だったりしてw」

複数人の男子からの野次がとんでくる。

「ソウスケは本当に怪我してるネ！言いがかりはやめるネ！」

「あ？ウルセエぞ中国人！」

「きやつ」

一人の男子がカユウを突き飛ばす

「おい！やめろ！」

「何だよ板倉あコイツに抱かれでもしたか？」

有川はまだ登校してないか

「は？何言ってるんだ？お前」

「あ？板倉のくせに口答えすんなよ！」

いきなり胸元を掴まれた

「つうつ」

「何痛がってんだよ！」

「肩やったって聞いたぜ」

「いいじゃん確認しようぜ！へい！」

「つてえテメエっ！」

流石に我慢できそうにないな。

少し反撃するか顔面でもいいか。

「双介君お弁当渡すのわすれっ……………今すぐその手を放して」  
望海が教室に入って俺の姿を見て言った。

「!!!?」

「ひっ!?!」

「……………あつ……………ああ……………」

望海が殺気を放った。

「!!!望海!やめろ!」

「ん?何が?」

「俺は大丈夫だから！やめろ望海！」

「でもこの人手放さないしカユちゃん突き飛ばされたみたいだし、周りの人も止めないよっ。」

望海がゆっくり刀に手をかける。

「まずい、完全に殺す気だ。」

「どうにかして止めないと！」

「ああ、大丈夫だよ殺しはしないから………ただ、五体満足とは限らないけど」

「のっ望海ちゃん！私もソウスケも大丈夫ネ！刀から手放すよ！」

「そうだ！望海！大丈夫だから！」

「なら、先にその人が双介君から手を放してよ」

「は？何で俺が言う事きかねえと」

「コイツ馬鹿なのか？」

望海の殺気に気づいてない？

「周りを見て見ろよ皆震えてるぞ。」

「そう？ならいい残す事は？」

「は？ねえよ。さっさと刀抜けよ板倉を盾にしてやるよ！」

「ならいつか………月龍……いくよ……」

更に殺気が強くなる。

「望海やめっ」

覚悟決めるしかないのか。

「やめんか！ど阿呆！」

「いったーい！何するんですか！“先生”！」

「何もどーもない！何してるんや！篠原！こんな教室で殺気放つ奴何処にいるんや！」

「でもっ！」

「でもない！それに殺気放つんやら周りじやなく限定せえ。この様になあ」

「ひっ!？」

俺の胸元を掴んでた手が離れた。

「板倉あ大丈夫かあ？」

「はいっ」

「おおそうかそうか。これで一件落着やなあ。 “松野” お後で指導室こいやあ。」

「…えっ…あのっ…」

「ん？返事はどないした？」

「はっはい！『獅子堂』先生！」

「おお、ええ返事や。ほな！皆席つけえ、篠原も自分の教室戻りい。」

「はーい」

「篠原あ、次の訓練倍なあ。」

「ええ、それはないですよ、先生」

「ええ、やない当然や。」

「ちえ。またね！双介君、カユちゃん！」

望海が教室を出ていった。

先生のお蔭で何とかなつた。

「げ？獅子堂何で此処に！」

「有川あ先生をつけえ。遅刻やぞ？」

「は？まだチャイムなつてっ」

「有川あ、訓練倍になりとうないなら。はよう席につけえ。」

「はい！すみませんでした獅子堂先生！」

有川が大人しく聞くなんてやっぱすげえな。

獅子堂蓮ししどうれんこの学園の教室科マスタースで元軍人。

強襲科を担任しているあとは体育の教師だ。

年齢は27とまだ若い。

昔はヤンチャだったらしい。

「ええ〜皆も驚いてるとおもうが『佐治』先生が体調崩してしもうてなあ、変わりにき  
たつて訳や。『医療学部』担当なのに笑つてしもうたわ。」

ほな、出席とるで〜」

獅子堂先生が出席を取り始めた。

HRが終わった。

「ソウスケ大丈夫だったか？」

「ああ、カユウは？」

「ちよつとぶつけただけネ。大丈夫ヨ。」

「は？何が？」

前の席で聞いて居た有川が聞く

「実は……………」

カユウが説明する。

「ふくん……………絶対許さん……………」

「まあ！獅子堂先生のお蔭で解決ネ！」

「ふーんで？その落ちこぼれは何でいるのよ病院でくたばったんじゃないの？」

「すぐ退院だ、望海と有川の応急処置のお蔭様でな。」

「あつそう居なくて清々するって思ったのに。」

「素直じゃないネ。」

「五月蠅いっての。」

「放課後」

怪我也あつてか探偵科の授業は免除されたので

普通の授業が終わった俺は帰る支度をする。

「ソウスケ、ゆつくり休むネ！」

「ああ、ありがとう」

「何かあつたらすぐ連絡するヨ！」

「俺は子供か！」

「変わりないネ。保護者の望海ちゃんは任務の準備でないネ。」

「大丈夫だよ、何かあつたらすぐ連絡するし流石にこの怪我じゃ撃てないしな。」

「そもそもソウスケはあんまり銃扱えてないネ。」

「うるせえつて。また明日な」

「バイバイネ！」

俺はカユウと別れの挨拶をした。

寄り道しないで帰らないとな。

「今日の飯はなんだろうな〜つとアイツは」

確か松野だっけか？

俺の数歩先に歩いてる。

絡まれたくないから別の道行くか。

方向転換しようとする

「板倉！・テメエのせいで！Cランクになっちゃまったじゃねえか！」

くそつ案の定絡まれた。

俺のせいじゃねえよ！と言いたい。

「そいつは悪かったな」

「ああ!?!ふざけんな！ちよつとこい！」

松野に連行される。

畜生厄日だ。

連絡はできそうにないか。

「つてえ懲りないなお前」

「あ？ウルセエ板倉の癖に！おいやつちまえ！」

物陰から取り巻き連中が現れた。

暇人かよ。

校舎裏つて人目が付きづらい場所なんだよな。

どう切り抜けるか。

「ぐあ？！」

いきなり発砲だど!?

イカレてやがるコイツ。

「安心しろつて訓練弾のゴム弾だよ！」

「松野さあん次俺いいつすか！」

「おう！好きにやれ！」

取り巻き連中からも発砲させる。

「ぐあ……………つく……………くつう」

下手に躲す事もできないか。

くつそ、防弾制服着てるからつて

普通に痛いんだぞ。

「望海サイド」

「先生！アレ！」

「こりや、いかななあ。松野の奴全然反省してへえんなあ。」

廊下の窓から双ちゃんが集団リンチにあつてゐるのを目撃する。

「やっぱり今朝絞めとくんだった！止めにいけます！」

「息の根をかあ？やめときい。それに屋上みてみい。」

「屋上？えっ？ 〃姫ちゃん!?!〃」

「お前さんと同じぐらい腹立てる奴がいたんやなあ。篠原、任務の準備せえ」

「でもっ！双ちゃんが！」

「大丈夫や。有川に任せといて現場いつてこい」

「……………わかりました。」

納得はいかないけど姫ちゃんに任せておけば大丈夫かな。

帰ったら双ちゃんを一杯甘やかそう。

「姫サイド」

「うん……………もう、『春樹』つたらちゃんとママのお手伝いするのよ?」

今日は訓練も任務もない日

学校の屋上で『愛しの弟』と通話中

「うんそれで?っ!」

下の方から発砲音が聞こえる。

「え?大丈夫だよ春樹!ごめんちよっとお姉ちゃん用事できた!またね!」

春樹との通話を切り発砲音を確認する。

あれは落ちこぼれの板倉と松野と取り巻き!

「くそっ!アイツ!」

良く見たら落ちこぼれがリンチにあってる。

「何してんのよ!『板倉』!アンタなら躲せるでしょ!」

馬鹿正直に全弾喰らってるし。

「ああ!もう!見てられない!」

今の装備はグロツクだけか。

「いや、十分か。世話かけんなよ板倉！」

私は屋上から飛び降りるのだった。

〔校舎裏〕

「はあっ……………はあっ」

「おい！もうバテたのか！これだから落ちこぼれは！」

「ぐあああ！」

肩の痛みさえなければ…

まずい意識がなくなっけきそうだ。

「じつとしてろ！板倉！」

空から声が聞こえる。

「ぐあー！」

「うあー！」

「ぐはあー！」

取り巻き連中が次々と倒れた。

「は？弱すぎるんですけど？落ちこぼれこんな奴にも負けんの？」

「ありつ……………かわつ…」

取り敢えず助かった。

センキューな有川

「もうくたばれ『板倉』」

俺の意識が遠く

マジで厄日だ。

「さて、松野！アンタ覚悟はできてんだろな！」

「あつ有川！俺は別に！」

「はあ？全部この目で見たんですけど？」

「ちっ！くそっ！」

「遅い！」

松野が発砲する前に避け腕を掴み銃を取りあげる。

「アンタ、マジでクズだわ。」

「ウルセエ！テメエだつて！落ちこぼれて馬鹿にしてんじやねえか！」

「武偵憲章1条 仲間を信じ、仲間を助けよ。」

そして、3条 強くあれ。但し、その前に正しくあれ。

松野、アンタこの意味わかる？」

「はっんなもんわかつてる！」

「わかつててやんな！このクズ！」

掴んだ腕を強く捻じる。

「ぐあああつ放せ！」

「良い？この落ちこぼれはアンタ何かより強いの！何故Eランクか考えた事ある訳！」

「は？弱いからじゃついてて！」

「本当クズね！」

「ぐぐ。パン！。パン！。パン！。ぐぐ」

「ぐあ？！」

私は取りあげた銃で松野を撃つ。

「ゴム弾よ。死にはしないわ。」

「ぐぐ。パン！。パン！。ぐぐ」

「ちっ弾切れか。」

松野はその場で悶えてる。

「良い！松野！私の仲間に手を出して見なさい！次は実弾でするわよ！」

「はい…」

「その倒れてる取り巻き！松野を医務室に運びな！早くしないと撃つ！」

「はっはい！」

「今すぐに！」

取り巻き連中が松野を運んでいく。

「熱くなり過ぎたし汗でベトベトだし最悪。」

気持ち悪い早くシャワー浴びたい。

「これだから落ちこぼれは世話の焼ける。」

板倉を運ばないと学園内は人が多過ぎるから近くには

「あそこしかないか最悪…」

「??」

「…いつてえ……………ここは?どこだ?」

有川が来てそれからどうしたんだ?

全く知らない部屋だぞ。

「目、覚めた?落ちこぼれ。」

「有川!?何で!」

「何でもこうもないわよ!この私が落ちこぼれを助けたんじゃない!」

「すすまん。助かった!で、ここは?」

「私の部屋よ…マジ最悪」

「え!?どうして!」

「治療できそうな所が他になかったからよ!」

「あつありがとうございます!」

良く見たら包帯やらついでる。

有川が手当てしてくれたのか。

「本当にありがとう 姫! いや! 有川!」

「次その名で呼んだら殴るわ。」

「すまん。」

「はあくで？板倉、アンタ何で避けなかった？」

「いやっそれははくすぐ終わるかなってハハハ。」

「この馬鹿！そのまま永眠しろ！」

「すまん。」

「望海ちゃんから連絡あつて迎えに来るまでいろつてわかった？」

「お邪魔してます。」

「はあく板倉食欲は？」

「ありますはい」

「そう、なら作るから。焼きそばで良い？」

「大丈夫。ありがとう」

「ねえ、板倉。アンタ本当に強襲科に来るの？早死にするわよ。」

「望海の強制命令だ。それに自分の身ぐらい守れるようにならないと。」

「あつそう………せいぜい足引っぱらないで」

「ああ、努力するよ」

「アンタ、アレルギーは？」

「特にないよ」

「そう」

会話が途切れ有川の調理する音だけが聞こえる。

良い音だ。

良くみるとここ、有川のベットか。

何か良い匂いする。

これが女子の匂いって奴か望海とは違うんだな。

「板倉！アಂತア本当に死にたいの!？」

「っ!？」

嘘だろ見えてないのに気づかれた。

これがAランク武偵か。

数分たつと

「できたわよ。」

「ありがとうございます！」

めっちゃ美味そう！

「めっちゃ美味しいぞ！有川！」

「落ち着いて喰えつての。」

よく見たら有川のエプロン姿可愛いな。

「何？殺すわよ」

「いや！何でもないっす！」

俺は残りの焼きそばを黙々と食べるのであった。

「ご馳走様」

「はい、お粗末様。」

有川が食器を片づける。

「本当に助かったありがとう有川」

「ふんっ私が無償でするとでも？」

「マジかいくらだ？」

「後で請求するからよろしく」

金足りてるかな。

望海と相談しないと。

「痛み止め飲んでけ」

有川から薬をなげ渡される。

「センキュー……………ふあ〜」

ねむたつ、この薬速攻制過ぎないか。

「寝たか…完食してくれてありがとう。早く直しなさいよ。」

〽〽ピンポーン〽〽

「はい」

多分、望海ちゃんね。

「姫ちゃん！双ちゃんの事ありがとね！双ちゃんは？」

「寝てる」

「あつそうなんだ！姫ちゃん何か良い事あった？嬉しいそうな顔してるよ？」

「別に何もなし。」

「なら、双ちゃんを運ぶね」

「うん。そうして」

「ふあゝ良く寝たゝ」

次目が覚めると自宅に帰っていた。

「あつ双ちゃん起きた？今晚御飯できるからね！」

「望海」

「ん？なあに？」

「迷惑かけたな」

「大丈夫だよ怪我直ったらいよいよ強襲科だね！」

「そうだな……………」

強襲科か俺もやる気出さないとな。

こうして俺の変った一日が終わるのだった。

## 第3話

「??」

「それはそれは苦勞したでござるな、双介氏」

「本当だよったく。有飛、コーラ貰うぞ」

「良いでござるよ、デュフフ」

「ぶはあくやっぱコーラは美味しいな。」

「当たり前でござるよ、双介氏」

「有飛、頼んだデータもらえるか？」

「しばし待たれよ。」

「あいよ」

「できたでござる」

「サンキュー」

「にしても双介氏が、強襲科に人生何かあるかわからんでござるな」

「マジでな。色々準備も必用だし。」

「まあ、なる様にしかでござるな、デュフフ」

「ああ、そうだな」

「双介氏がランク上がったら拙者も上がるでござるよ」

「何もそこまでしなくても」

「拙者達は同じEランク、上がる時も一緒にござるデユフフ」

「有飛ありがとな」

「デユフフ」

コイツの名前は竜胆りんとうゆうと有飛

俺と同じEランク武偵で情報科の1年。

見た目は皆が想像するオタクだ。

迷子の猫探しの時に情報をくれたやつだ。

俺は今、有飛のパソコンルームにいる。

とある依頼をしていたからだ。

「それにしても双介氏、怪我は大丈夫でござるか？」

「ああ、医者にも完治って言われたしな。」

「それは良かったでござる。」

「サンキューな有飛、今度遊びにこいよ！」

「気がむいたら行くでござるデユフフ！」

俺は有飛の部屋を後にする。

「双介氏 “強襲” の危険人物なんか見てどうするのやらデユフフ」

「自宅」

「ただいま〜」

「あっお帰り、双ちゃん！朝ご飯できてるよ〜」

「ありがとう望海、今日は何？」

「今日はおでんだよ〜」

「そうか。」

朝からおでん!?

しかも作つたのか。

「嫌だった？」

「いや、好きだけど大変じゃないか？」

「ん？ そうかな。私は作るの好きだから何もだよ。」

望海は食卓におでんの鍋をおく。

「今日からいよいよ強襲科だね！ 準備できてる？」

「ああ、できてるよ。」

「そっか！ 良かった。楽しみだね双ちゃん！」

「そうだな。いただきます。」

正直言つて楽しみではないんだが、我儘言つてられないか。

「双ちゃん、訓練頑張つてね！」

「ああ頑張るよ。この大根美味いな」

「でしょう！ 仕込みはりきつちやつた！」

自慢気に胸をはる。

「そこまでしなくても」

「良いのっ！ 私が好きでやつてるんだし。ほらほら！ 早くしないと間に合わない時間になつちやうよ！」

「ああ、わかってるって」

おでんを堪能しつつ、朝食を食べ終わるのだった。

「双ちゃん、ネクタイまた曲がるよ。」

「そうか？普通だと思っただけだな。」

「全然違うよ。はいっ直ったよ」

望海がネクタイを直してくれる。

そんなにきつちりしなくてもな。

「そろそろ行く時間だね双ちゃん。」

「ああ、そうだな。忘れ物はないよな」

「うん、必用な物は全部このバックにしまったから大丈夫だよ双ちゃん。」

「ありがとう望海」

「何もだよ双ちゃん。じゃ、いこっか。」

「ああ。」

望海と俺は部屋の鍵を閉めて学校へと向かう。

「学校」

「また強襲科でね！双介君。」

「またな望海」

望海と別れ俺は教室へと入る。

「はよう〜」

「おはようネ！ソウスケ！」

カユウが挨拶をしてくれる。

他の奴は目を逸らす。

松野もちらつと見ただけで目を逸らした。

まあ、良いや。

「ちよつと入口に突っ立つな。落ちこぼれ」

「ああ有川、おはよう」

「早くどけろつての。」

「すまん。」

そう言い俺は席に座る。

「本当、これだから落ちこぼれは！」

「姫そんなにイライラしてやっぱり生理力？」

「だから何でそうなるのよ！」

「イライラは健康に毒ネ！ミルク飴あげるヨ。」

「いらないわよ！良くそんなの喰えるわね！」

「普通のミルク飴ヨ？」

「濃厚過ぎんによ！その飴は！」

「濃い的好キ、女子は特にネ！」

「黙れ痴女」

「それだけで痴女扱いオカシイネ！」

カユウと有川が口論しはじめる。

「ふっ」

思わず笑ってしまう。

「何笑ってるのよ！この落ちこぼれ！」

「ソウスケもやつぱり姫がオカシイって思ってるネ！」

「すまんすまん。そろそろチャイムなるぞ。」

「ふんっ」

「私の勝ちネ」

それぞれ席に座る。

HRが終わり普通の授業へと進み時間が過ぎるのであった。

「放課後」

「強襲科は確か此処だよな」

普通の授業を終えた俺は強襲科の施設に着いた。

今まで探偵科だったから此処に来る事なんてなかったしな。

手帳の地図にも書いてあったから間違いないだろう。

「すうくはあく」

緊張してきたので深呼吸する。

「よしっ！行くか………失礼します！」

気合いを入れ中に入る。

「おっ！きよったな！板倉！」

「あっ！双介君！」

獅子堂先生と望海が挨拶する。

周りの人からもジロジロ見られる。

「皆！注目しい！コイツが今日から転科してきた」

「1年Eランクの板倉双介です！よろしくお願い致します！」

「そう、固くならんでええ。今日からコイツ等がお前さんの新しい仲間や。」

「はっはい！」

つて言われてもな上級生の先輩方もいるし凄え見られて緊張がとけないんだが。

「緊張するか？最初はそんなもんや。板倉、お前さんがEランクであろうと関係ない。ただ強くなる為そして人の為に強くなるや。武偵であるかぎりなあ。此処はそういう場所や。わあつたか？」

「はい！」

「ええ返事や。ただまあ訓練はめっちゃ厳しいでそこんとこ忘れんな。」

「わかりました！」

事前準備である程度知ってるしな。

「よしよし、最初は小手調べに近接戦闘を見たい。初歩的な事がかまへん。できるか？」

「はい！できます！」

「ほな、素手での戦闘やからそうや。有川。あ！お前さん相手してみい！」

「はあ!?何で私がやらないと！」

筋トレをしていた有川が言う。

「同じクラスやろうくええからやってみい」

「別の奴でも良いじゃん！」

「有川あ、そんなに訓練増やされたいんか？そうか？なら他の奴は？」

「いえっ！喜んで引き受けます！」

「なら、良かったわ〜」

「……………ちっ……………」

不機嫌そうな有川が近くに来る。

「先生！何で私じゃないの！」

「篠原あ、お前さんは加減できないやろ〜」

「できますよっ！双介君相手ならっ！」

「いや無理やな〜」

「何ですか!?!」

俺もそう思う。

望海は若干の戦闘狂だから加減ができるなんて考えられん。

相手すると怪我再発しそう。

「よっよろしく有川」

「ふんっ……………速攻終わらせる……………」

「よしよし！なら初めるでく。板倉あ！拘束されたらどんな手使ってもええ解くの心がけえく」

「はい！やってみます！」

「よーい！初め！」

俺は戦闘体勢に入る。

対する有川はまだ入ってない。

「ねえ、板倉。アンタ怪我とかは？」

「ばっちり完治した。」

「そう……………ならっ！手加減なしねっ！」

「！」

有川が戦闘体勢に入り間合いを責めてくる。

「くっ！あぶねえ！ぐあっ」

初段のパンチはミスリードだったのか避けた所を殴られる。

「しゅっ！」

鋭いパンチを繰り出す有川。

素早い。

「ぐはあっ」

一撃一撃が重い。

これがAランク武偵の力か。

「ほら！ほら！避ける事もできない！流石落ちこぼれっ！」

「くうっ」

畜生

「ムツツリ板倉！これで終わり！」

「ふっ……………」

「なっ!？」

何とかかわせたか。

「はあっはあっムツツリ言うなっ！」

反撃する為、有川に足払らいする。

「ちっ！とつととくたばれ！」

「ぐあっ！」

有川が飛び上がり俺の首を太股で絞める。

これ初歩的な事だったか？

「ぐう……………あっ……」

「落ちろー！」

マズいどうにかしないと！

どんな手でも……………そうか！

「くっくっのー！」

有川の靴を脱がす。

「は？……………ひあんっ！」

そしてそのまま足をこちよばす。

「今だ……………はあっ……………はあっ」

拘束を解けた隙を見て体勢を整える。

「あちやくやつてもうたか〜」

「双介君……………」

え？何その反応？

周りの人達の空気も凍ってない？

「いくた〜く〜ら〜！」

「うわあ…」

何か凄いオーラでてる様に見える。

怒りの頂点迎えた様な。

髪黄色になりそう。

スパー○○○人！みたいな！

「え？高っ」

有川が高く飛び上がった。

「あっ水色…」

スカートの中が見えてしまい声に出してしまう。

「永眠しろおおおおおおお！」

＜脳天カカト落し！＞

「グエっ」

綺麗に喰らった俺はその場に崩れ落ちる。

「はあっ……はあっ……殺す！」

「そこまでや！有川、もうやめい見てみい綺麗に落ちてるわ。」

「双介君!?!大丈夫?双介君!」

「板倉くどんな手つて言ったが、乙女の逆鱗に触れたらアカンで。篠原く医務室連れてきい」

「はい!双介君!しっかり!まだ死ぬ時ではないよ!」

篠原が板倉を抱え医務室に連れて行く。

「他に私の下着見た男子!潰すからでてこい!上級生とか関係ない!」

周りの男子は全力で首を振る。

触らぬ神に祟りなし。

「[医務室]」

「つつつう〜」

「( )は医務室か流石にわかる。」

「双介君起きた？」

「ああ。望海が運んでくれたのか？」

「そうだよ。それよりも双介君！女の子にアレは駄目だよ！」

「いやっそれしか思いつかなかった。」

「ああいう時は後ろ向きに倒れこんで相手にダメージを与えるの！」

「そうなのか」

全く考えつかなかったな。

「それにね強襲科では姫ちゃんにこちよばしはタブーなんだよ！」

「そうなのか？」

「うん！前に上級生の先輩がからかって、姫ちゃんにこちよばしをしたんだけどね、その場にいた男子全員絞めたの。」

「そうだったのか。」

他の人達大丈夫なのか？

「今日は獅子堂先生がいたから被害は最小限だと思うけど。」

「最小限って確定なのかよ。」

「じゃないと姫ちゃん収まらないから。」

うわあ、覚えておこう。

次会うの怖いんだが。

「ちゃんと姫ちゃんに謝るんだよ。」

「あつあぁ。」

「それじゃ、私は強襲科に戻って双介君が起きたって報告してくるから、もう少し休んでね！」

「了解」

望海は医務室から退出する。

にしても水色か有川あいうのも持つてるんだな。

前目撃してしまった時は黒が多かったな。

「そこの変態起きてる？」

「有川何で!?!」

「獅子堂に今日の訓練は良いから板倉の面倒見れって言われたんだよ。しかも、命令な。」

明らかに不機嫌な有川が言う。

「そうなのか……………」

「まだ、10人しか絞めてないのに……………」

もう、10人が犠牲に。

俺の所為で申し訳ない。

「で？アンタ起きて大丈夫なの？」

「ああ望海が看病してくれてたから大丈夫だ。それより、有川」

「あ？何？」

「その……………すまんかった」

「ちつ……………イチゴ牛乳」

「え？」

「私の気がすむまで毎朝イチゴ牛乳買ってこいって言うてんの！わかった!？」

「わっわかったよ！」

「ふん……………」

「……………」

沈黙が続く。

「アンタってさ最近気絶し過ぎじゃない？」

「そっそうか」

俺も最近思ってたよ。

結構凶星なんだよな。

「落ちこぼれだからか……………」

「違うと言いたい。」

「まあ、私に関係ないけど……………良くかわしたわね。」

「たまたまだ……………」

「あっそ」

「あと俺はムツツリでは」

「ムツツリでしょアンタは。いや、ドスケベか」

「いや違う!」

「私知ってる限りそうでしょ」

「……………」

何も言い返せん。

悔しくて泣きそう。

あの頃の俺を憎むぞ。

「元氣そうだしもう帰って良い?」

「いや俺に言われてもな。」

「は？アンタも帰るんでしょ？獅子堂が言ってたし」

「それ初耳なんだが。」

「今言ったから良いでしょ。早く支度してこい。」

「了解つす。」

帰り支度をすべく俺と有川は医務室を出た。

「自宅」

「ふうくただいま〜」

勿論、望海はまだ帰ってきてない。

「夜飯、流石に作らすのは申し訳ないな。」

家事ができない訳ではないので今日は俺が作るか。

「オムライスでも作ってやるか」

食材は望海が常を買ってくれてるから十分にある。

望海が帰ってくるの楽しみだな〜

「ただいま！双ちゃん！ごめんね少し遅くなっちゃった。

すぐに夜ご飯の支度するね！」

「お帰り、ご飯できてるよ」

「え？双ちゃんが!?あつ！オムライスだ！」

望海が飛び跳ねる。

小学生かよ。

「ありがとう！双ちゃん！」

望海がとびつきりの笑顔で言う。

「まあ、たまにだけだな」

こんなに喜んでくれるのなら良かった。

「あつそうだ双ちゃん。単位足りてる？」

「あつやべ足りてねえ」

「もう、ちゃんと管理しないと駄目だよっ！」

「すまん。依頼探すよ」

「うん！」

明日依頼探ししよう。

こうして今日の一日が終わるのだった。

## 第4話

「自室」

今日は学校が休みの日だ。

しかし、任務を探す為に学校に行かなければならない。

学校のネット掲示板を見ても良いんだけど後手続きが面倒だから俺は直接行く。

「双ちゃんおはよう！朝ご飯できてるよ〜」

「おはよう望海。今日は？」

「今日は鮭のホイル焼きとあさりの味噌汁と蟹の炊き込みご飯だよ〜」

「おっそうか。」

まさかの海鮮づくしだったか。

にしてもまた手のこったのを。

「いつもサンキューな望海」

「え？別に普通だよ〜学校行くんでしょ？」

「ああ、そうだよ。」

「私も一緒に行つて良い？」

「別にかまわんが任務探すだけだぞ？」

「うん、わかってるよ」

「なら、いただきます。」

「はいめしあがれ。」

俺と望海は朝食を堪能したのだった。

「よし、そろそろ行くか」

〽〽〽ピロソソソ〽〽〽

「ん？有川からだ」

「姫ちゃん、何て？」

へアンタ学校よる前にカユウの店にきなさい。拒否権ないから。〽

「だよ」

「なら、行かないとね！」

「カユウのお店」

「ついたか………ん？定休日？」

「本当だ〜」

表ドアには定休日と貼紙がしてある。

おかしいなやっているはずなんだかな。

「いらつしやネ、ソウスケ、望海ちゃん。こつちヨ」

立ち止まっていると裏口からカユウが出てくる。

俺達はそのまま裏口から入店した。

「板倉遅い！………あれ？望海ちゃんもきたんだ。」

「うん、駄目だった？」

「いやつむしろ好都合よ。」

入ってきた早々、有川に遅いと言われる。

普通だと思うが。

「んで何の様だよ有川」

「板倉、アンタ任務探しに学校へ行くんでしょ？コレ受けなさい。」

一枚の紙を渡される。

なになに

{ショッピングモールの警備}

必用ランク：E以上

人数：2〜4人

報酬：現金

内容：店内の警備

「ほう……………日程は……………今日?」

時間は15時か今が12時だから後、3時間か。

カユウの店からだど急いでも一時間かかるか。

「いやそもそも人数が……………」

「ここに4人いるじゃない！」

「マジか」

「望海ちゃんは大丈夫よね？」

「うん！大丈夫だよ！双ちゃんと一緒に任務するの初めてだね！」

「ああ………カユウも受けるのか？」

「ええそうよこのお節介焼きに言われてね。」

「誰がお節介焼きよ！」

「姫以外誰がいるのよ。」

カユウが普通の口調で喋る。

「折角、営業しようとしたのに姫が双介の為に任務受けたって連絡きてね。

急遽臨時定休よ。」

「はあ!?誰が落ちこぼれの為って言ったのよ！」

「ツンデレギャルが言ったのよ。」

「んだとこの猫かぶり乳女！」

「ふんっ負けおしみ？」

「何がよ！」

「胸の大きさよ」

「はあ!?!デカければ良いって訳じゃないでしょ!」

「あら、私は形も良くつてよ。」

「私だって良いし!」

有川とカユウが白熱してる。

「ねえ二人共、私の前で胸の話題?」

「あっ」

二人が静かになる。

「どうしたの?二人共」

「ごほんっ!板倉アンタ、プロテクター買いなさい。」

話題を逸らした有川が言う。

「プロテクター?どうしてだ?」

「自分で考えろ」

「今回の任務は私服なのよ。防弾制服じゃないからね。」

有川の変わりにカユウが答えてる。

「私服なんだけど望海ちゃんある?」

「あるよっ 姫ちゃん。カユちゃんの所に!」

「そうね双介のも確かあつたはず。」

「何であるのよ？」

「五月蠅いわね、いちいち突つかからないで。」

「でもっ」

「それよりも姫、双介に言う事あるんじゃない？」

「そうよっ！板倉、アンタ新しい銃手に入れなさい！」

「は？どうしてだよ」

「今のアンタじゃ『デザートイーグル』を使いこなせないからよ。別にそれしか使うなって言われてないでしょ？」

「そうだけだよ……でもなく金もないし」

「アンタでも使えそうな銃があるのよカユウ。」

「はいはい。双介まずは見てくれるハンドガンにしては珍しい銃なの。」

カユウが一丁の銃を渡す。

「これは？」

「これはね、IMI社の『ジェリコ941』って言って

通称『ベビーイーグル』って呼ばれる銃なの。」

「ベビーイーグル………」

何というか良い響きだ。

「しかもこの銃バレルとマガジンを変えるだけで色んな弾が撃てるのよ。」

「ソイツは凄い！」

「えつとどう凄いの？」

「それはだな望海！簡単に言うとか鞘を変えるだけで切れ味が変わるって事だ！」

双介が昂奮気味に言う。

「へえ〜それは凄いね！」

「だろ！あつでも……………」

「どうしたのよ？」

有川が聞く。

「いやっ金が……………」

「双ちゃん！お金なら心配しないで！こうゆう時の為に貯めてたから！」

「でもっ！望海」

「良いんだよ双ちゃん。この先も必用となってくるかもだし、それに双ちゃんがこんな  
に嬉しそうなんだもん遠慮しないで！」

「だって板倉。良かったわね」

「双介心配しないでそこまで高くないわ。」

「ありがとう望海。カユウいくらだ？」

「それはこれくらいね。」

「なるほど……………」

少なくともデザートイーグルよりは普通に安いな。

「カユちゃん今払うよ!」

「え? 後日で良いよ望海ちゃん。安いつて言っても大金に変わりないもの。」

「ううん大丈夫だよ。はい」

望海はカバンからお金を出す。

「え? こんな大金持ち歩いてるの!？」

有川が驚く。

「うん万が一の為にね。」

そうだったのか知らなかった。

「うん丁度ね。双介、弾はどうする?」

「なら、9mmで頼む。」

「わかったわ。少し待ってね」

カユウが工房へ入って行く。

「サンキューな有川」

「別に前みたいにならないのが嫌なだけよ。着替えてくるわ。」

有川は更衣室へと入っていった。

「望海も本当にありがとうな。」

「ううん。気にしないで双ちゃん。」

「お待たせ。はい双介」

カユウがベビーイーグルを渡してくれる。

「これはっ！」

「好きでしよう？この色」

「ああ！」

ベビーイーグルは塗装されて居てデザートイーグルの色と同じ漆黒だ。

「カユウまさか……………」

「双介なら欲しいって言うかなって思って塗装してたのよ。」

「試し撃ちしても良いか！まだ時間に余裕あるし！」

「ええ、使い方はわかるわよね？」

「ああ！」

双介は射撃場に入る。

「男の子だね〜カユちゃん。」

「そうね望海ちゃん。」

「カユちゃん。ありがとう」

「喜んでくれて良かったわ。」

「あれ？板倉は？」

「射撃場よ。」

「はあ？子供かつ。」

「まあまあ、姫ちゃん。双ちゃん、喜んでるから。あつ！姫ちゃんの服可愛い！」

「そう？ありがとう」

「あからさまに男受けを狙ってる格好ね。」

「あ？何？いちやもん？」

「別に。私も着替えてくるわ。望海ちゃんは？」

「私も着替える！」

カユウと望海はそれぞれ更衣室に行く。

「後は、板倉だけか」

（あんな嬉しいそうにする何て）

「良かった……………」

「ふう。ん？二人は？」

「着替えてる。板倉も早く着替えてこいっての。」

「ああ、すまん！」

俺はカユウの工房へと入って行き着替えをすませる。

「私の服装についてはノーコメントか……………」

「あら？褒めて欲しかったの姫？」

「カユウ!?アンタ何時の間に！」

「今来た所よ。」

「アンタも男受け狙ってるじゃない！胸元空いてるし！」

「生憎こういうのしかサイズないのよ。」

「いやっ！絶対あるから！」

「あらそう。そういう事にしとくわ。」

「コイツ……………」

「もう！すぐ喧嘩する！駄目だよ二人共！」

「だってコイツがっ！」

「姫が勝手に突つかかってくるからっ！」

「ふ・た・り・と・も！」

「すみませんでした」

「もうっ。」

「着替え終わったぞ……………おお……………」

着替え終わった俺が見たのは私服姿の三人だった。

カユウの服装ヤバイな詳しくは言わんが動く度に凄く揺れてる。  
最高じゃないか。

「もう！双ちゃん！すぐそうやってカユちゃんの胸ばっかり！」

「双介つたらエッチ」

「ふんつこのムツツリ」

「いやっ俺はだなあ！」

「それより皆コレを後、武器は見えないように。カムフラージュして。」

有川が小型の無線を渡す。

「コレなら髪に隠れるから大丈夫なはず。ボタンも押さなくていいやつよ。」

「了解」

皆それぞれ無線などつけ装備を整える。

「双介、予備マガと弾薬よ。今回はサービスしとくわ。」

「すまない助かる。」

揺れる。

「エッチ」

「あっいや」

「ちっ………ふんっ！」

有川に叩かれる。

「いってえ！何すんだ！有川！」

「知らんムツツリ」

「双ちゃんつたらもう。」

「皆！準備できたわね！」

「ああ」

「ええ」

「うん！」

有川は手下げカバンに銃を入れ、俺はリュックに銃を、

カユウは見た目が扇子なので腰に、望海は刀なので楽器ケースにいれている。

「出発ね！カユウ！」

「はいはい。皆車に乗って」

「はい！」

カユウが用意してくれた車に俺達は乗る。

ちなみに助手席に有川、後部座席に俺と望海が乗った。

いよいよ警備任務の開始だ！

## 第5話

「シヨッピングモール」

「着いたわよ。」

カユウの車が駐車場に止まる。

「いよいよか」

「そうだね！」

「ねえ、姫。私も行かないとだめ？」

「何よ急に」

「あの喋り方疲れるのよ。」

「なら、やめれば？」

「事情知ってる癖に………はあく。よしっ！皆行くネ！」

少し間が空いてからカユウが気持ちを引き締める。

「まずは依頼人に状況確認よ。」

有川が先頭になってお店に入っていく。

複数人での任務は初だからハマしないようにしないとだな。

「武偵4名ただいま到着しました！」

「良く来て下さりました！私マネージャーの沢渡と申します。」

スーツ姿を身にまとった30代前半の男性が答える。

「依頼内容はご依頼した通り店内の警備に当たっていただきましたのです。」

「畏まりました。」

「本当なら警備強化をすれば良い話なのですがすみません。」

「いえいえ！私達は武偵法を反しない限り何でもするそれが武偵ですから。」

有川がこんな言葉使いする所なんて激レアだな。

「助かります……………本当何も起きなければ良いのですが。」

「何かご心配事でも？」

「いえっ耳にした話なんですけどショッピングモールを狙った、愉快犯がいると聞きました。」

「愉快犯ですか……………聞いた事はないですが警戒に当たります！」

「お願い致します。」

「はいそれでは失礼致します。」

「猫被りネ」

「何か言った？」

「別にネ」

「それじゃ、カユウは1階のフードコートを見海ちゃんは2階の楽器屋付近を板倉は3階のゲーセンを私は4階の洋服屋付近を担当するわ。何かあれば無線を。決して1人で向かわないで以上！」

俺達はそれぞれが担当する場所へと向かう。

「カユウサイド」

私が担当するのはフードコートか。

土曜日だからか人が多いわね。

これじゃ何かあってもわかりにくいじゃない。

そもそも何で私がフードコート担当なのよ、お腹空くわね。

「姫お腹空いたネ」

へは？真面目にやんなさいよ……………まあ、自腹切るのなら良いわ。

食いながらやんなさい。警備つて事忘れないでね。ヽ

「言われなくてもわかかってるネ。キッチンとこなすアルヨ。」

姫との無線を切る。

手軽に食べれて見晴らしが良い所に座らないと。

そうね………全体を見るのならあの当たりか。

「望海サイド」

「2階に到着つと。」

私は楽器ケース背負ってるから当然違和感がない。

楽器屋付近だよね。

良く良く見ると種類多いんだね。

楽器なんて琴ぐらいいしかできないよ。

ギターとかできる人凄いな。

周辺を見渡しても何か異変がある訳ではないしな。

「おかしいな」

「何かございましたか？」

近くの店員さんに声をかけられる。

「あついえ！見てただけですのぞ！」

「左様でございますか。何かあればいつでもお声がけ下さい。」

「はい！」

ふう、どうにかなった。

おかしいって言ってしまったのは何か胸騒ぎがするから。

でもこの階じゃなさそうだし明確に説明できないけど姫ちゃんに無線をいれよう。

「姫ちゃん。」

「どうしたの？望海ちゃん。」

「あのね上手く説明できないんだけど胸騒ぎする。」

「胸騒ぎ………望海ちゃんが言うんだもん信じるわ。」

「ありがとう。また何かあつたら連絡するね。」

「了解。」

双ちゃんやカユちゃんは大丈夫かな。

「双介サイド」

俺は3階のゲーセンにやってきた。

このゲーセンは普通のより少し広いから全体をまわるのは苦勞しそうだな。

学生やら家族連れが多い。

土曜日だもんな。

武偵高の生徒いそうだな。

「あついた」

間違いないあの後ろ姿は

「何してんだよ『優飛』」

「そつ双介氏!?なるほどそうでござったか。」

「ん?どういう事だよ?」

「双介氏が此処にいる理由でござるよ。あの紙打ち出したの拙者でござるよ。デユフ」

「そうなのか。で?お前は何してんだ?」

「見てわからんでござるか？ フィギュア採集でござる。」

良く見ると足元には取ったであろうフィギュアが置いてある。

「こんなにと取ったのか？ 凄いな。」

「そうでござろう？ デュフフ。」

「あんまり取り過ぎるなよ、出禁になるぞ。」

「心得てるでござる。」

「俺は向こう見るからじゃな。」

「またでござるデュフフ」

「姫サイド」

私は4階の洋服屋にやってきた。

ブランド物ばかりのお店が沢山。

「あの服着れば褒めてくれたのかな……………」

ぼつりと眩やいてしまう。

この感情が辛い。

「いけない任務に集中しないと。」

愉快犯か……………

私は怪しい人物がいないか辺りを見る。

するとカユウから無線が入りその後すぐ望海ちゃんから無線が入った。

「喰いしんぼうめ……………つたく……………それにしても胸騒ぎか……………」

望海ちゃんが言う事はまず当たる。

一緒にペアになって何度経験したことか。

一体このショッピングモールで何が起きるの。

<<<ドカン!>>>

下の階から爆発音が聞こえた。  
板倉の所!?

「双介サイド」

「痛い……………」

「大丈夫でござるか双介氏!」

「なんとかな……………」

向こう側を見に行った途端、近くにあつた両替機が爆発した。

「ひゅうー!人に当たりましたぜ! アニキ!」

「派手で良いじゃねえか!」

謎の二人組が物陰から出てくる。

「金もゲットできて最高っスね！」

「なんだよアイツ等……………そうだ無線！」

幸い爆発した煙でコチラには気づいてない。

「くそっ！壊れてる……………」

イカれてしまったらしい。

「双介氏これを使うでござる、拙者の高性能無線。チャンネルは合わせたでござるっ。」

小言で優飛が自分の無線を渡す。

「助かるっ……………（こちら板倉！ゲーセンにて両替機が爆発、

謎の2名が飛び散った金を拾ってる！応援頼む！）」

（今向かう！望海ちゃんとカユウは!?!）」

（私もいけるよ!）」

（すまないネ、コチラでもトラブルよ金属バットと銃を持った3人組が暴れてるヨ）」

「ちっ！2箇所同時か………望海ちゃんは1階に！私は3階に向かわ！」  
「了解！カユちゃんすぐいくから無理しないで！」

無線でのやりとりが終わる。

「おい！お前等何者だ！」

「アニキ！何か出てきましたぜ！」

「ああん？んだテメエ」

「武偵だ！器物破損及び窃盗の罪で逮捕する！」

「ぶっ武偵!?アニキどうします？」

「はっどうって事はねえよただのガキに何ができる。」

アニキと呼ばれた男が銃を取り出す。

「テメエ等！これ以上騒いだら撃つぞ！」

周りの人達が静まる。

くつたれ………人質か避難を優先させるべきだったか。

「で？ガキ俺達をどうするって？」

銃口を向けられる。

「くっ……………」

「カユウサイド」

「なっ!?!」

フードコートで肉マンを食べていたら入口から  
3人組がバットと銃を持って堂々と入ってきた。

「おらー！おらー！金目になる物全て置け！」

「はやくしろ！」

1の男がバットでテーブルや椅子を破壊する。

騒がしくも賑やかであったフードコートが冷えきった。

そこで双介からの無線が入った。

「こちら板倉！ゲーセンにて両替機が爆発、謎の2名が飛び散った金を拾ってる！応援頼む！」

〔今向かう！望海ちゃんとカユウは!?〕

〔私もいけるよ!〕

〔すまないネ、コチラでもトラブルよ金属バットと銃を持った3人組が暴れてるヨ〕

幸い入口から遠くに離れた席に座っていたので連絡ができた。

〔ちっ! 2箇所同時か………望海ちゃんは1階に! 私は3階に向かわ!〕

〔了解! カユちゃんすぐいくから無理しないで!〕

そうは言ってもね望海ちゃん………私放っておけないのよ。

〔やめるネ! こんな事して何なるカ!〕

〔んだあ? おつ良い体してんじゃんお姉さんこっちこいよ!〕

〔きやつ／＼／＼〕

私はワザと捕まる。

こうして捕まれば少なくとも人質がとられる可能性は低いはずだ。

〔マジででけえ〕

「やんっ／＼／」

もう一人の男が私の胸を揉む。

そうそのまま揉んでろクズが。

「やっやめるネっ」

「おおすげえ」

「おい！後でいくらでもできるだろ今は金だ。」

リーダー各の男が言う。

ちつくそつたれ。

「おつそうだったそうだった。お姉さん後でたつぶりね！」

「おいおい使い物にならなくなるだろお前がしたら。」

「言えてる言えてる。」

「可愛いがるだけだろぎやはは。」

どんな使い方する気よ。

本当クズ以下。

3人組は色んな人からお金を巻き上げる。

どうしようか………強行突破する？

「双介サイド」

「ちっ！そのまましやがめ！板倉！」

上の方から声が聞こえる。

「<<。パン！>>>

「うおっあぶなっ」

咄嗟にしやがむ。

頭かすった気がするんだが！

「ぎよえ!!?アニキ何処からか撃ってきやした！」

「ちい！おいずらかるぞ！」

「させるかっ！」

「<<。パン！>>>

俺はリユックからベビーイーグルを取り出し威嚇射撃をする。

「ひよええ！アニキどうます！」

「くそっ！おいお前も撃て！」

「わかりやした!!」

2組はコチラに発砲してくる。

素人の発砲だかわす事ができるが。

「ああ！拙者のフィギュアが！」

「五月蠅い、キモオタ。喋んな。」

「有川！」

「酷いでござるよ〜姫え！」

「喋んな豚」

有川が優飛のフィギュア達を投げ全体的にした。

「板倉、何でキモオタがいるのよ」

「遊んでたみたいだ」

「あつそ……………キモオタ！一般人の避難をしろ！」

「承知でござる姫え！」

優飛は有川に言われた通り一般人を避難させてる。

「マジキモ……………板倉、良くあんなのと友達できるわね。」

「良い奴だぞ優飛は……………」

俺と有川は喋りながら銃を構え2組へとの距離を縮める。

「あつアニキ！ぐえ」

「お前盾になれ！俺は逃げる！」

「かつこ悪い兄貴分ね」

＜＜＜パァン＞＞＞

容赦なく有川は逃げようとした奴の足元を撃つ。

「大人しくしろ！」

「ぎよえええ」

俺は下つ端みたいな奴を取り抑える。

「せやあ！」

「ぐおつ……………」

有川は兄貴分へ回し蹴りをし気絶させる。

「姫え！避難完了でござる！」

「あつそ。キモオタ手伝え」

「承知でございます」

「板倉、キモオタと一緒にコイツ等頼むわ。私は1階の援護に行く！」  
「了解！気をつけろよ！あとっ！似合ってるぞ！その服！」

「うっさい！（今言うんかい。言うのが遅いつての。）」

「カユウサイド」

「ちっ3万しかねえのかよ」

老夫婦からお金を巻き上げている。

いよいよ動くかそう思っている

「お兄さん楽しそうだね私も混ぜて♪いっばあいご奉仕するから♪」

楽器ケースを背負った望海ちゃんが現れた。

そんな演技できたのね知らなかったわ。

「おっ！マジで！」

ころつと騙されてるし。  
男つて単純ね。

「うん♪」

男が望海ちゃんに近く。

「はいご奉仕だよ♪」

「ぎややややややや！うっ腕が！」

近づいてきた男の腕を掴み無理やり間接を外す。

男は悶絶してる。

「なっ!?!」

「てつてめえ！」

リーダー各の男が驚き気性の荒らい男がバット振り被りながら

望海ちゃんに突っ込んでいく。

「やだあ怖い」

「は？え？」

男が持つていたバットが真つ二つになる。

そして尻餅をつく。

「もう危ないでしょお兄さん♪」

何時の間にか楽器ケースから刀を出していた望海ちゃん。  
やだあ怖い。

そんな事考えてる場合じゃない！

望海ちゃんをとめないと！

「もう少し待っててよ後でござ奉仕してあげるからさっ！」

悶絶していた男の腕を蹴る。

「あゝ あああああー！」

「ねえお兄さん痛い？痛いでしょー！」

更に刀の棟の部分で追撃。

「ああああああああー！」

「こつこのー！」

リーダー各の男が発砲する。

「……………」

望海ちゃんは刀で銃弾を切る。

うわあ凄い初めて見たわその芸当。

うん、私が止めに入るの無理ね。

周りに捲き込みそうだし。

避難優先ね。

「今の内に逃げるネ！早くしないと怪我するヨ！向こうから逃げられるネ！」

私は一般人に向かって叫んだ。

「もう、せつかちなお兄さん。ちゃんとご奉仕しにいくから待っててよ。」

「あつあぁ」

リーダー各の男も尻餅をつく。

「痛いよね！苦しいよね！泣きたいよね！」

「ゆるる。じてえ」

「お兄さん達を見てピンときたよ……………」

「窃盗や強姦を繰り返しているチーム名はS Zだっけ？」

「い。だあい。だあい」

「痛いんだ？でもね！今まで襲った女の子達はこんなんじや済まされないの!!!」

刀の棟を何回も振りおろす。

「私はね！貴方方が襲った女の子達を見てきたんだよ！精神が壊れた子！言葉を話なくなった子！シヨックで意識不明な子！色んな子を皆！この目で見てきた！私はね！親

御さん達からの依頼でね！貴方達を懲らしめて欲しいって！そして二度と表世界に出さないでくれって！優しいよね！大事な子供を傷つけられたってのに！誰も殺してって言わなかったんだよ！のこのこと現れてくれて助かったよ！探す手間がはぶけたし！ねえ！聞こえてる！」

悶絶してた男は泡を拭いて気絶してる。

望海ちゃんはゆっくりと気性が荒らかった男に近く。

「そのバットで脅してきたんでしょ？」

「ひっひい！」

「答えてよ！」

「あ、あ、あああああ！」

手の平を刀で貫く。

こんな望海ちゃんは初めて見た。

私は恐怖心でその場にたちすくむ。

依頼受けていたんだ……………

「誰か助けて！お願い！何でもしますから！許して！つてほら！言ってみなよ！」

刺していた刀を抜く。

「血が！血があ！いてえ！ぐあああ！」

「その手で女の子達を殴ってきたんでしょ？被害にあった子がね辛いのに一生懸命勇気を出して話してくれたの。何回も殴られて大人しくなった所を無理やり襲われたって。その手があるからいけないんだよね？」

望海ちゃんはもう一つの手の平を貫く。

「づああああああああああああ！」

そして引き抜く。

「ねえ？楽しかった？気持ち良かった？抵抗できなくなった子でモテ遊んで？」

「はあ、はあ。」

「私はね超楽しいよ？だってそうでしょ？」

超楽しいって言ってやりまくったんだもんね！」

血が出てる両手に追い討ちをかけるかの様に刀の鞘で叩く。

「大量出血で死んじゃうね！そう言い放った子もいるんだよね？」

それ以上の苦しみを私が与えてあげる！」

刀の峰で何度も何度も頭蓋骨を叩く血が出るまで。

そして男は倒れる。

「もう終わり？これからなのに。」

リーダー各の男にゆっくりゆっくり近く。

「ご奉仕にきたよお兄さん。貴方が計画をたててあの人達にやらせてたんだよね？」  
「ああつあつ……………」

恐怖で会話ができなくなってる。

「女の子のお友達の前で酷い事してたんでよ？どう？自分が見る側は？」

「あ……………」

「ん？なあに？聞こえない！」

望海ちゃんは男の顔面に蹴りをいれる。

「こーやって！見てた子に質問して聞こえないって言つて顔を蹴つたんだよね！」

髪を掴み顔を更に蹴る。

「女の子の髪や顔はね！命と同じぐらい大事なの！貴方にわかるの！！！！」

「ごおほお」

「一体どういう生き方をすればこんな事できるの！！」

貴方達に少しも良心はなかったの！

自殺しようとした子がいたの！！

悲しんで！苦しんで！そういう決断になった子がいるの！！！！

貴方達に！アンタ等みたいなゴミに！わかる！！！！」

！！！！

望海ちゃんは刃を向けて男の首を狙う。

「駄目っ！望海ちゃん！」

私はなんとか声を振り絞って叫んだ。

間に合わない！

＜＜＜パァン！＞＞＞

「そこまでよ！望海ちゃん！」

「姫ちゃん？どうして邪魔するの？」

「望海ちゃんを人殺しにしたくないからよ。」

姫がきてくれた……………良かった。

「でもっ！姫ちゃんだって一緒に被害にあった子を見てきたでしょ！」

「ええそうよ。武偵憲章2条！依頼人との契約は絶対に守れ。

依頼忘れたの？それに武偵は人を殺してはいけない。

許されてるのは武装検事だけよ。」

「そうだけど！でも！」

「もう十分でしょ？それにカユウが怖がって漏らしてるわ。」

「もっ漏らしてないわよ！」

何でわかつたのよ。

「でも姫ちゃん！」

「望海ちゃん……………まだ収まらないなら私が相手になるわよ？」

「……………ごめん……………やっとな冷静になれた。」

「さ、コイツ等を裁く為に病院に搬送させないと！」

私達の任務と被ってしまったのは予想外だけど。」

「姫ちゃんごめん」

「別に。謝るのは私にじゃなくてカユウにでしょ？」

「ここは私一人で十分だからカユウのケアをしてあげて。」

「うん……………カユちゃんごめんね怖かったよね？立てる？」

「うん……………」

「まずは着替えないとね………歩けそう？」

「ごめん膝が笑って歩けそうにないわ。」

「そっかならおぶってあげる。よいしょっと。」

「のっ望海ちゃん！服汚れちゃう！」

「これくらい何ともないよ！」

私は望海ちゃんと共に女子トイレに向かった。

「女子トイレ」

「ちよっと待つててね！着替え調達してくる！」

「うんありがとう望海ちゃん。」

本当に怖かった。

友達のあるな場面もそうだし人があんなにも血が出るのは初めて見た。

私だって武偵だから耐性あるはずなんだけどそれすらこえてしまった。

望海ちゃんがマジギレしてるの初めて見た。

「はあ！はあ！お待たせ！サイズはバツチリだと思おう！」

「ありがとう望海ちゃん。」

私は望海ちゃんから着替えをもらい服をぬぐ。

本当下着までぴったりね。

「カユちゃん！そのごめんね！あんな姿見せちゃって！怖かったよね？」

「うん……………望海ちゃんのマジギレ初めて見た……………」

「あはは……………その……………マジギレではなかったんだ……………」

私、本気になるとうこうじゃないから……………」

「え!? そうなの!？」

あの上があるの!？」

「ごっごめんね！」

「望海ちゃんの本気なんて見る日くるのかな？」

「え？それは絶対に見せないから！約束する！」

「うん約束」

着替え終わった私はドアを開ける。

「わあ！カユちゃん似合ってるよ！」

「うん……………」

私は望海ちゃんに抱きついた。

「よしよし……怖かったね……ごめんね……良い子良い子」

「双介サイド」

「ふう〜後は尋問科に任せるか」

謎の2組を警察に明け渡す。

途中悲鳴が聞こえたが有川達は大丈夫かな。

「双介氏〜ここは拙者に任せて行くでござる。デユフフ」

「すまん!助かる!」

俺は有川達がいる1階へと向かった。

「何だコレ?」

1階のフードコートを見て言った。

男達が病院に搬送されてるのを目撃する。

「ああ板倉来たんだ。運ばれてるのは犯人達よ。よく見な」

「切傷……………まさか！望海が!？」

「ええそうよ。後一步遅かったら一人の首飛んでたんだから。」

「望海達は!？」

「トイレ」

「おつおう。」

何故にトイレ？

「板倉アンタさあ、ブレーキ役になつてくんない？」

「おいおい、超暴走機関車侍ノゾミだぞ？俺にはとても」

「ちつ使えないやつ。アンタそんな風に思つてたの？家事全部やつてもらつて最低。否定できないのが悔しいわ。」

「悪かつたな役ただずで…………俺に止められる訳ないだろ…………」

「ふんつ……………本気……………出せば……………」

「無理だよ俺は。」

「あつそ」

「姫ちゃんお待ちせ！あつ、双ちゃん……………」

「よお……………ん？カユウ何で服装変わってんだ？生理か？」

「おっ女の子には色々あるのよ！あと違う！」

望海にひつついでいるカユウが言う。

「無神経」

「双ちゃんデリカシーー！」

「は？今のか？」

乙女心はわからんな。

取り過ぎずなんとか事件解決をするのであった。

まあ、色々と問題は山積みだけどな。

## 第6話

「双介サイド」

二箇所同時事件が終わった俺達はそれぞれ自宅に帰り翌朝を迎えた。  
今日は日曜日だ。

細かい報告は有川と望海がしてくれた。

俺は用事があるので今は優飛の家にいる。

「優飛コーラ貰うぞ」

「良いでござるよ〜」

俺は冷蔵庫を開け冷えたコーラを飲む。

やっぱ美味しいな。

「それで優飛どうだったんだ？」

「あの二人組の事でござるな〜。」

「ああそつだ。」

優飛も一緒に報告しに行っていたので聞いた。

有川と望海は今日忙しく結果をきけてない。

「一週間前からシヨッピングモールを狙っていたみたいでござるな。ルーレットで場所を決めていたみたいでござる。」

尋問科に連れて行ったら簡単にはいたでござる。」  
呆気ないな。

それにしてもルーレットか。

本当遊びみたいに犯行をしてたのか。

「楽しいのか？捕まるのに。」

「愉快犯なんてそんなものでござるよ。問題は三人組の方でござる。」

「三人組？どんな問題だ？」

「現在も病院にいて重傷でござる。」

「なっ!？」

重傷だと!？」

望海の奴そこまでやったのか。

一体何が？

「まあ、望海殿の方で任務を受けていたみたいでござる。」

「たまたま」犯人があの場合にいてそうなったでござる。」

「そうだったのか……………たまたま何て事あるか？」

俺には何か引つかかる。

愉快犯の方はわかるとして三人組の方はわざわざシヨッピングモールに行くか？

「拙者もそこが気になって調べたでござる。デユフフ。」

メガネをクイッとあげて優飛が言った。

「流石だな。」

「照れるでござるよ。えーとっ!？」

〽〽〽パン!〽〽〽

「どうした!？」

優飛が突然テーブルに置いてあったコルトパイソンでパソコンを破壊した。

「ハッキングされたでござる!」

「ハッキング!？」

「そうでござる!」何者かが拙者のパソコンをハッキングしたでござる!」

「なんだと!？」

パソコン破壊するレベルって一体。

このタイミングで起こるのは普通ありえない。

これはなんだか

「きな臭いな……………」

「そうでござるな……………拙者達を狙つてのタイミング……………」

「おかしいな……………俺学校に行つてこの事を報告してくる！」

「頼むでござる！双介氏！」

「ん？何だ？」

「拙者達スキルアップした方が良くも知れないでござる！胸騒ぎするでござる！」

「ああ！俺もそう思つていた所だ！じゃな！」

明らかにおかしい。

黒幕が居るに違いない。

それにこの胸騒ぎは何だ？

「拙者もこうしてはならんでござるな……………本気出すか。」

「カユウサイド」

「はあゝ憂鬱ね」

お店は休みにしてるし昨日の件で疲れたわ。

お店開けた方が気分転換になったかも。

「はあく私戦闘向きじゃないもの……………」

護身ぐらいならできると望海ちゃんの様なきはできない。

それに私が強かったらあんな

「あんな風に恐怖で動けない事なんて無くなるのに……………はあく」

武偵として情けないし悔しい。

そして友達を止める事が何よりできなかつた。

姫が来てくれなかつたら

「あの人の首飛んでたのかしら……………」

想像するだけで怖い。

「はあく」

いけない！

こうしても駄目だわ。

「双介は『デブ』の所にいるし望海ちゃんは学校だし……………」

あといるのは

「姫しかいないわー！」

私はスマホを取り出し連絡する。

『姫、今何処にいるの?』

『はあ?ハンバーガー屋だけど?』

『今から行っても良い?』

『なんでよ?』

『お願い』

『好きにすれば?』

『やった(\*>▽<\*)』

『ありがと、姫。』

私は支度をしハンバーガー屋に向かった。

「姫サイド」

「マジ疲れた」

昨日の件でまだ疲れがとれない。

報告もだるかったしデブもいるし望海ちゃんの暴走の件で私が怒られるし

犯人は重傷だし元々は板倉の為に受けた任務なのに私達の任務とブッキングしたし。色々と疲れた！

何か爆発しそうだったので私が大好きなハンバーガー屋にきた。疲れた時はここが一番ね。

「いらつしやいませ〜店内でおめしあがりですか？」

「店内でアボカドチーズバーガー3つとビーフステーキバーガーが2つ  
照り焼きチキントマトバーガー2つハンバーガー1つポテトL2つナゲット特大1つ

イチゴシエイクが3つイチゴ牛乳が5つでお願いします。」

「かつかしこまりました！以上でよろしいですか？」

「はい」

店員が驚いていた。

何か変だったかな？

態度？

会計を済ませて席に座る。

「ふう〜ん？」

携帯を見ているとカユウからメッセージが入った。

アイツ暇なの？

「おっお待たせしました！」

「どうも」

店員は驚きを隠せない顔をしていた。

何が変なの？

わからない。

「何から食べようかな」

「姫！お待たせネ！」

「え？マジ？早っ。」

「普通ネ。座るヨ？」

「はいよ。」

私は荷物をずらす。

「ありがとネ！」

「ちよっ隣じゃなくても良いでしょ！」

「え？駄目アル？」

「普通は前に座る！」

「……………別に良いじゃない」

「アンタ声戻ってるわよ。」

「これだけ騒がしいなら大丈夫でしょ……………」

「くつつくなって！」

「嫌よ」

「はあ？意味わからん。」

「別に良いじゃないのよ……………姫のケチ」

「アンタねえ」

「お待たせ致しました。」

「ありがとネ！」

「……………で？暇なのアンタ？」

「暇と言えば暇よ」

「歯切れ悪いわね。」

「……………人に会いたかっただけよ。」

「あつそ……………用件は？」

「普通に会いにきただけじゃない。」

「アンタ鏡見たら？」

「そんな冷たくしないでよ。」

「ちつ……………さつさと話なさいよ。食べながらだけど。」

「ええ。ねえ、姫？」

「何よ？」

「貴方コレ全部一人で食べるの？」

「そうだけど文句ある？」

「いやつないわ。ごめん気にしないで。」

「変なの……………んく美味しい♪」

「……………はむっんっ！美味しい！」

「当たり前よここのハンバーガーは全部自家製だもの。」

「そうだったのね……………ねえ姫。」

「何よ？」

「姫は怖くて動けなかった時ってある？」

「はあ？どういう意味よ？」

「そのままの意味よ。ある？」

「人間だものそりやあるでしょ？」

「どう対処した？」

「足搔いた。」

「どうやって？」

「人それぞれでしょ？」

「そうだけど………」

「何？アンタまさか昨日の事？」

「うん………」

「怖かったとかそういう？」

「………うん………姫く」

「うわっちよっ泣くなつての！ああくもう！

今テイクアウトにしてもらうから待ってる！」

私は袋をもらう為レジに向かった。

全く世話の焼ける。

「はい！行くわよー！」

「行くって何処に？」

「私の家よ！アンタ歩き？」

「車……………」

「運転できる？」

「うん……………」

「じゃ行くわよ。」

「うん！」

私はカユウの車に乗り自宅へと帰るのであった。

「ほら、上がって。」

「うん。お邪魔します。」

カユウを部屋に招き入れた。

「はい此処でなら大丈夫でしょ？」

「うん……………姫え…ひつく…」

「我慢すんなっての」

「姫え……………うえええん……………怖かったっ……………」

「何もできなかつたのっ！……うわあああん！」

「うん………そっか。」

「血がっ……沢山でっ………望海ちゃんがつ……怖くてっ……でもっ……

……着替え用意………してくれてっ……嬉しかったっ………」

「沢山だったね。怖かったの？超暴走機関車ノゾミだからね」

「ひつく………なあにつ………それえっ………ひつく……」

「板倉が言つてた。超暴走機関車ノゾミは俺にはとてもって」

「そうすけが？」

「うん。馬鹿でしょ？アイツ。」

「うん！そうすけらしい！」

泣きやんだか。

「姫え私強くなりたい！」

「別にそのままが良いでしょ？」

「でもっでもっ！」

「格闘技だけよ？私が教えるのは。カユウには銃とか似合わないわ。売ってるほうが似合ってるわ。」

「本当!?!ありがとう姫！」

「はいはい。食べて良い？お腹空いてるんだけど？」

「うん食べよ！」

私とカユウは食事を再開するのであった。

「望海サイド」

私は今、昨日の件で教師科に呼び出されて学校に来ている。

「篠原あ、お前さん何で呼び出されたかわかるか？」

「はい。」

「……………まあ、正直お前さんは良くやあつたつて先生は思ってるが『コイツ』がたいそうおかんむりでなあ。せいぜい絞られてやあ。」

素晴らしい残し獅子堂先生は反省室を出ていった。

「失礼します。」

一人の生徒が入室してくる。

「こんにちは望海ちゃん。」

「はっはい！こんにちは『桃華』先輩！」

「望海ちゃん、正座」

「はい！」

私は先輩に言われた通り椅子から降りて正座する。

「ここで質問です。何故私がここにいるのでしょうか？」

「それは………えつとつ私にありがたいご説教してくれるためです！」

「うん、正解だよ。」

背筋が凍る。

どうしよう。

目の前にいる先輩は東城桃華とうじょうももか先輩。

衛生科の2年生で1年の前半まではSランクで現在はBランク。

争い事を嫌い普段はとても温厚な性格。

私と姫ちゃんが入学当初からお世話になっている。

その先輩が何で怒っているかというと

「望海ちゃんまた重傷人出したでしょ？」

「はいすみません。」

「いくら任務だからといって望海ちゃんの場合はやり過ぎなの。わかる？」

「はいわかります。」

だってそれしかできないんだもん。

「望海ちゃん。聞いてるの！」

「はっはい！聞いてます！」

「いつも言ってるよね？やり過ぎは駄目だって。」

「はい。」

「望海ちゃん、そうやって不貞腐れされないの！」

「……………はい」

だって重傷ぐらいで皆大袈裟なんだもん。

犯罪者だよ？

「ねえ望海ちゃん。一回潰されてみる？」

「いえ！遠慮しておきます！」

笑顔で何て事言うんだ先輩は。

温厚な性格何処に消えたの。

「望海ちゃん、次はないからね？」

「はい！すみませんでした！」

やっとな解放される。

「正座」

「はい！」

まだ終わってなかった。

「双介サイド」

「はあつはあつ先生！」

「なんや板倉あそないな息切れしてどないした？」

俺は学校を猛ダツシユで行きついた。

「実は……………」

俺は優飛の家で起こった事を説明した。

「なるほどなあ……………よしわあつた他の先生方にも伝えておくわ。」

「ありがとうございます！あのっ先生！」

「なんや板倉まだなんかあるんか？」

「あのっ今の俺に足りない事を教えて下さい！」

「そないな自分で考えって言いたい所やが……………考えた上での目やなあ。」

「お願いします！教えて下さい！」

「せやなく。体力と筋肉……………話はそれからや！」

「はい！ありがとうございます！」

俺は先生との会話を終え外に向かう。

「がんばれや……………板倉双介。」

「外」

「体力と筋肉か、走り込みと筋トレしないとなくん？あれは……………」

「いたたたつ足の感覚ないよ〜もう桃華先輩の鬼〜」

「よっ望海！大丈夫か？」

「うえ!?双ちゃん!?大丈夫だよ！平気平気！」

「そっそうなのか？とてもそうには」

「大丈夫だよ！うん！あつそうだ！今日のお夕飯は手抜きでもいい？」

「ああ、大丈夫だ。出前でも大丈夫だぞ？」

「作るから大丈夫だよ！さっ帰ろう！」

「ああ。」

こうして俺達は自宅へと帰るのであった。

## 第7話

「自室」

「双ちゃん。行つてらっしやい！」

「ああ、行つてくる。」

「2時間後には朝ご飯できてるからね！」

「それまでには戻つてくるよ。」

「ペース配分と水分補給忘れないでね！」

「わかつてる。」

「あつあつ」

「俺は望海の子供か。」

「だつて心配なんだもん。」

「ジヨギングしてくるだけだぞ？」

「うん………美味しいご飯作つて待つてるからね！」

「ありがとう」

望海に見送られながら俺は外に出る。

昨日俺と優飛におこった事を望海、有川、カユウに話した所。

「そうだったんだね！私も気をつける！」

「ふくん。まあ、頭の片隅にでもいれておく。」

「私も警戒しておくわね。双介も気をつけてね。」  
と返事していた。

望海に体力と筋肉をつけると言ったら

「うんわかったよ！朝早起きするんだね。私が起きる時間に起こすね！体力つく料理も作らないとね！」

とても協力くれるみたいだ。

「うしっ！やるか！」

準備体操を終えジョギングを開始する。

ジョギング何て中学の最初以来だな。

「ふっ……ふっ……ふっ……」

息使いは大丈夫そうだな。

毎日の積み重ねが大事なんだよな。

「ふっ……ふっ……あれはっ？」

見覚えのある後ろ姿だな、でも髪型違うから人違いか？

「なんかよう？」

「いやっ何でもねえよ。」

「あつそ。」

やっぱり有川だったか。

「アンタ、ジョギングはじめたの？」

「まあな。」

「そう……………ついてこい……………」

有川がダツシユする。

「ちよっおまつ！」

俺もあとについていく。

それ走り込みだろってか速いんだが！

「はあつ！はあつ」

「遅っ」

「お前が速過ぎんだよっ」

「ほら次！」

「ちよっ！」

マジかよ休憩できてねえよ。

体力お化けか

「アンタ失礼な事考えた？」

「いやっ何も！はあっはあっ」

「体力なさ過ぎでしょ……………ダツサ」

「はあっ……………はあっ……………有川が……………速過ぎ何だよっ」

「普通だし」

「いやいやっ絶対普通じゃねえっ」

「ふん……………こんぐらいで根あげるならやめれば？」

「やめねえよ」

少しでも強くなりたいからな。

「あっそ。次行くわよっ！」

「くっそ！」

有川のポニーテールを必死に追いかけたのだった。

「んじや私はこれで」

「はあっはあっああっ。」

有川は一切ペースを落とさなかったし息切れもしてない。  
これが強襲科のAランクか。

少しでも追いつかないとな。

俺は息を整えながら帰宅した。

「お帰りなさい！双ちゃん。」

「ただいま。シャワー浴びてくる。」

「うん！背中流す？」

「何当たり前みたいに言ってるんだよ。ご飯大盛りで頼む。」

「えへへ。はいわかったよ。」

俺は汗を流す為、風呂場に向かった。

ふう〜継続しないとな。

「さっぱりした〜望海今日は？」

「今日はね、新鮮な焼き鮭と若布の味噌汁、白菜の漬物だよ。」

流石が望海だな。

きちんとバランスがとれる食事だ。

「新鮮？」

「うん！朝市場で良いのあったから買っちゃった！さあ、めしあがれ。」

「いつもサンキューな。いただきます。」

俺は朝食を食べ学校へ行く支度をする。

「さて、行くか」

「うん！あつ、双ちゃんまたネクタイ〜」

「いや、曲がつてないつて。」

「曲がつてます〜……………はい直つたよ。」

望海が俺のネクタイを正してくれる。

自然と胸元を見てしまう。

何というか頑張れ。

「もう双ちゃん！」

「いっ行くぞ！」

「頑張れつてどういう事!?あつ、逃げた！」

望海は戸締りをしっかりと確認し俺を追いかけてくる。

声漏らしてないんだが！

あつヤバイ速いぞ。

体力もたん。

「教室」

「おはよ〜」

俺は教室に入る。

「おはようネ！ソウスケ！どうしたカ？その頬？」

「ああ、おはよう。別に何でもねえよ、カユウ。」

「そうアルカ？腫れてるネ。」

「大丈夫だ………有川おはよう」

「は？何話かけないでくれる？」

「ほらよお姫様」

「よろしい。誰がお姫様か！」

「姫がツツコミしたネ。」

俺は有川にイチゴ牛乳を渡す。

それにしても頬が痛い。

「アンタ、望海ちゃんに何かした？」

「別に……………」

「望海ちゃんに何したか？ソウスケ？」

「何もしてねえって気にするな。」

「嘘ネ、ソウスケ。」

「何したのよ？」

「マジで何もしてないって……………ん？」

胸の事思っただけだし。

一件のメッセージがくる。

『双介氏く連絡でござる〜』

『どうした？優飛。』

『拙者、ただ今家の都合で学校をお休みしてるでござるデユフフ』

『そうなのか。わざわざ連絡ありがとうな。』

『それで2、3日連絡できそうにないでござるよ〜』

『わかった。大丈夫か？』

『全然問題ないでござるよ〜ではではデユフフ。』

優飛とのやりとりを終えた。

2、3日連絡できないか。

本当に大丈夫なのか優飛。

問題事に捲き込まれてないと良いが。

「誰からネ？」

「優飛からだ。」

「デブ!? ソウスケ、まだ友達続けてたでアルカ!？」

「そこまで言うか普通？」

「カユウに同感ね。」

「俺には友達なんだよ。」

キャラ濃いからか？

優飛がかわいそうだと思う。

「昼休憩」

「ソウスケ！屋上行くネ！」

「ああ、今行く」

昼休みになり俺は弁当を持ちカユウと屋上に行く。

「お待たせネ！姫、望海ちゃん！」

「あつカユちゃん！……………居たんだ双介君。」

「おっおう。」

うわあ、望海まだ怒ってるのか。

「ソウスケ、本当に何したネ？」

「さあな。」

「さあな。じゃないよ！聞いて姫ちゃん、カユちゃん！今朝ね。」

望海が二人に今朝の出来事を話す。

やっぱりそうなるか。

「うわ、最低……………」

「ソウスケ！それは言つては駄目ネ！」

「別に言つてねえし！そもそも小さいとは言つてないし！思つてもねえよ！」

「でも、双介君！頑張れつて言つたもん！」

「だから、言つてねえつて！思つただけだつて！」

「それはもう言つたと同然ですう！」

望海がプンプンしてる。

「だいたいね！Dは小さい訳じゃないんですう！姫ちゃんやカユちゃんがデカいだけなのー！いやーデカ過ぎー！」

「え？望海ちゃん!?!」

「とつとばつちりネ！」

「だってそうでしょ！双介君、カユちゃんと姫ちゃんのおっぱい見てから私を見るもん！」

「いやっ！決してそういう事では！」

「バレない様にカユちゃん、姫ちゃんを見てから私を見るもん！」

「うわ、引くわ〜」

「ソウスケ、男なら堂々とするネ。」

「違うって！俺は見てねえって！」

「男の子は何!?!この胸に夢や希望でもあるの!?!」

「ひあん！望海ちゃん！やめっ」

望海が突然、有川の胸を揉む。

「隣じゃなくて良かったネ」

「ちよつ助けなさっ………やあん！」

「何を食べたらそんなに大きくなるの！」

「しっしらないっ……やあっ……だめっ……みっ……見んな板倉！」  
「てえっ！」

有川が自分の箸箱を投げ俺のオデコにクリーンヒット。

俺が悪いのか？

「望海ちゃん私の胸で気がすむなら触るネ！ 姫がかわいそうネ！」

「ちくしょう！ ちくしょう！」

有川の胸を揉むのをやめ、次はカユウの胸を揉む。

「ンツ……望海ちゃん……激しいネ……あっ……」

「はあっ……はあっ……はあっ……くっ……」

「デカい！ デカいよお。ちくしょう！ あんまりだ！」

凄いカオスな空間になってしまった。

「ブチアゲ！」

ん？ 今喋る猫？ いなかったか。

気のせいかな飯くわねえと。

「放課後」

「満足！満足！」

すつきり顔の望海が言う。

「酷い目あつたネ……………」

「ええそうね……………」

対する有川とカユウはぐったりしてる。

「私はここでバイバイネ。皆頑張るネ！」

カユウは装備科の授業があるので俺達と別れた。

「じゃ、私達も訓練しないとね！」

「ええ。」

「ああ。」

俺達は強襲科に入る。

「おつ！今日は3人仲良くやなくええでええで！先生そういうの好きやねん！有川どな  
いした？具合悪いんか？無理は良くないでえ。」

獅子堂先生が元気良く言う。

「いえ大丈夫です。少し疲れることがあつたぐらいです。」

「そうかあゝまつ、無理そうならすぐ言え。」

「はい。」

「さつ、お前さん等もウォーミングアップせえ。」

「はい」

「はい！」

俺達は準備体操をし各自筋トレを開始する。

「よし！そこまでや！皆よくきけえ今日は特別授業や！篠原あ！板倉あ！」

「はいー」

「お前さん等二人で組手せえ！」

「え？私と双介君がですか？」

「そうや！正しくは木刀でやけどな。……………板倉できそうか？無理なら素手でかまへん。」

木刀でか……………大丈夫だろう。

真剣でないなら俺だって。

「……………はい！できます！」

「双介君……………」

「そうかあ！ならば3分後にはじめるでえ。皆もよお見とき。」

「Eランクの動きを？」

「そもそも組手になるのかな？」

「板倉大丈夫か？」

周りの人達がざわめく。

「静かにせえ。黙ってみとき、訓練増やされなくなかつたらなあ。」

「そつ双介君大丈夫？」

「……………すう……………ふう……………」

俺は深呼吸を少ししでもこの胸の高鳴りを抑える。

正直言うと怖い。

刀の形をしているだけで震える。

正格には「自分が刀を握る」のが怖い。

皆が見てるしいつまでも怖じ気づいてられないか。

大丈夫だ、木刀だ。

「双介君！」

「あ!? すまんどうした？」

「本当に大丈夫? 素手でやったほうが！」

「いや! 大丈夫だ。望海……………手抜くなよ? たたきのめしてくれよ?」

「うっうん! 双介君の為に全力で行くよ! 後、今朝の恨みも込めて!」

え? まだ収まってないだと?

有川とカユウの犠牲は無駄だったのか。

可愛いそうに。

「ちっ……………」

ほら、有川に睨まれてるし。

俺が悪いのか?

「ほな! 始めるでえ。篠原、板倉、準備ええか?」

「はい!」

「お願いします!」

「篠原は負けたら反省分なく。いくで〜始め!!!」

獅子堂先生の合図が響く。

「え!?私だけ!?……………はああ!」

言葉に動揺を見せるもすぐに切り替え一閃を放つ。

「つうっ!」

一撃が重い。

流石は望海だな。

「へえ〜今の受け止めれるんだ結構本気だったんだけどなっ!」

「ふっ!」

望海の振りをいなす。

痛てえ。

手がヒリヒリする。

「もう!流さないでよっ!せやあ!」

「いつまでも逃げてられんからなっ!」

鏝競り合い。

純粹に力と力のぶつかり合いだ。

「鍛錬を続けてる私に勝てる訳がないでしょ!」

「そっだな、よっ!」

俺は望海に足払いをする。

「きやつ！それは武士としてどうなの！」

「俺は武士じゃないからわからん。」

「もおう！頭きたんだから！」

望海の目つきが変わる。

「今朝の恨み！」

望海は突進しながら一閃を放つ。

ヤバイかな。

「はあ！」

俺も一閃を放ち応戦する。

「やあああ！」

「つあつ!？」

俺の手から木刀が飛ぶ。

「そこまでや！板倉良い線いつてたな〜」

「やったあ！反省文なしだ！」

「はあつはあつきつ」

神経すり減るぜ。

「マジかよ篠原とやりあつただと!？」

「本当にEランクなのか」

「一体何が起こつたんだ？」

「ふん……遅いのは全く（お帰り私の王子様）」

「皆よお見てたか。板倉はこんぐらいならでできるんや。Eランクやからって馬鹿にしたらアカンでえ。さっ！訓練再開や！」

獅子堂先生は皆に声をかけ訓練が再開した。

「うくん消化不良」

「おいおい勘弁してくれよ」

「板倉どうやった？」

「結構キツイつす。」

「そうかあ。まっ、少しずつ馴らしていけばええ。」

「はい！頑張ります！」

こうして一日が終わるのであった。

## 第8話

「??？」

「ねえねえそろそろ我慢できないんだけどお」

学生ぐらいの年齢の少女が言った。

「またれよ！主殿の命令が聞けんのか？」

忍者の格好をした男性が言う。

「だって普通のふりするの疲れるのー」

「そんなぐらいい我慢しろよ小娘」

40代前半の男性が言った。

「うっさいなあ〜おっさん達はすっこんでろ」

「某もか!？」

「はっはあ。言われてやんの」

「言われてるのはそちらであろう？」

「二人に言ってるの！」

「賑やかですね。」

黒いスーツ姿の男性が言う。

「あつ！マスターだ！」

「主殿！」

「おつようやくきたのかよ。」

「待たせたね、いよいよ計画をおこないますよ。」

「つて事は私暴れられる！」

「すまない君は少し待機だ。」

「ええ〜つまんなーい。」

「すまないね。やって貰うのは武器商人達のルートを我々の物にしたい。頼めるかい？」

「佐賀？」

「御意！」

佐賀と呼ばれた忍者の男は姿を消す。

「いつみてもなれねえなく本物の忍者つてのは凄いで。」

「おっさんは年寄りだからわかんないんだよ。」

「生意気な小娘だなく犯すぞ」

「できるもんならやってみな。ブツ切つてやる。」

「二人共よしたまえ。直に暴れられるさ」

「外」

「はあっはあっはあっ」

今日も良い天気だな。

絶好のジョギング日和だ。

「アンタまだ続けてたの？」

「有川！おはよう」

「ふんっやめると思ってたわ。」

「やめる訳ないだろ。続けられてるんだしそれに、毎朝有川が付き合ってくれてるからな。」

「アンタが勝手について来てんでしょ……板倉」

「あいよ。」

有川の後をついて行く。

俺の方は何も依頼がないまま3日が過ぎた。

優飛はまだ連絡がとれず望海が捕まえた3人組はまだ重傷らしく証言を聞けてない。

毎朝のジョギングは有川が鍛えてくれる。

少しだがついてこれるようにはなってきた。

相変わらず速過ぎただけだな。

「遅い！もつとスピード出せつての！」

「…はあつ…はあつ…はあつ…いついつもより速くないか!？」

「はあ？普通だし。」

「はあつはあつそうかよつ」

「まあ、アンタにしてはマシね。」

「ありがとよつはあつはあつ」

「ほら！次！」

「あいよ！」

今日も有川のポニーテールがなびく。

そろそろラストパートか。

頑張るか。

「んじや。イチゴ牛乳今日は2本」

「は？何でだよ。」

「私の髪を見ていやしい顔してたから後、胸ガン見してた。」

「見てねえよ。」

「何？歯向かうの？別に変態って一生呼ばれるだけだから私は構わないけど？」

「3本にさせていただきます！」

一生変態は困る。

女子からの目が怖くなる。

「よろしい。」

有川は自宅方向へと走っていく。

俺も帰るか。

「自室」

「ただいま」

「お帰りなさい！双ちゃん！今日もお疲れさま。」

「ああ。望海今日は？」

「今日はね〜出汗巻き卵と手羽元の煮物、大根の味噌汁に栗の炊き込みご飯だよ〜」

「今日もめっちゃ美味そうだな！急いで浴びてくる！」

「時間に余裕あるんだからゆっくりで良いよ〜」

俺は急いでシャワーを浴びに行く。

「ふう〜さっぱり」

「さあ、飯あがれ！」

「いただきます！」

この出汗巻き丁度良い味付けだ。

手羽元の煮物も美味い！

望海の手料理は最高だな。

「あつ！双ちゃんあのねっ」

「ん？どうした？望海。」

「私今日の午後から何日になるかわからないけど実家に行かないといけないの。」

「そうなのかそれはまた急だな。」

「うん、お母様からの呼び出しでね。」

「おばさんからの？大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫だよ。用事があるついでに顔みただけだと思うから。」

「そうなのか、わかった。」

「それでね！今日から双ちゃんカユちゃんの家に私が帰ってくるまで泊まって欲しいの。カユちゃんの許可はもらってるから！」

「いやいや待て流石に年頃の男女二人の寝泊りはマズくないか？」

「私と双ちゃんの良いの？それともカユちゃんとかかするの？」

「いやっする訳ないだろうっ！」

「本当かな？双ちゃんカユちゃんの胸好きだしな〜」

「そう思うのなら泊まらなくて良いだろ？」

「もう決定しました。我儘言つてないでいう事聞いてっ！」

お泊りセットは用意してあるから！」

何時の間に……………ジョギング行ってる時か？

一人でも大丈夫なんだがな。

腹をくくるしかないか。

でも、不安だな。

大丈夫か俺。

「さっ！時間過ぎちやうから食べて食べて。」

「ああ。」

俺は望海にせかされながら朝食を食べ終わる。

着替えを済ませ準備する。

「双ちゃん私がないと寂しい？」

「そういう望海はどうなんだよ。」

「あつ質問で返したく。私は勿論寂しいよ？でも、連絡もとれるしたまには良いかなって思つて。」

「そつそうか。」

「あつ照れてるく。さあ、出発しよ！」

「ああ。」

俺はお泊りセットを持ち外にでる。

おもつ………何々入つてるんだ？

「双ちゃん。」

「ん? どうした?」

「手、つなごっ!」

戸締りをすました望海が言う。

「いやっなんでだよ。」

「良いから良いから!」

望海に手を握られ学校に向かった。

「学校」

「着いた〜」

結局つくまで手を放してもらえなかった。

周りの目が恥ずかしい。

「朝からラブラブネ!」

「あっカユちゃん! おはよう!」

「おはようネ！望海ちゃん。」

「今日から双ちゃんをお願いね！我儘言ったらすぐ連絡してね！」

「了解ネ！バッチリ任せるネ！」

「我儘言わんつて。」

「どうかなく」

「怪しいネ、ソウスケ。」

俺を何だと思ってるこの二人は。

我儘言わないし。

「んじゃね！双介君！カユちゃん！」

「ああ、気をつけろよ」

「気をつけるネ！望海ちゃん！」

望海は自分の教室に向かって走っていく。

「私達も教室行くネ！」

「ああ。」

俺とカユウは自分達の教室に行く。

「教室」

「およはうネー！ミンナ〜」

「はよう〜」

俺とカユウは同時に教室に入った。

「……………」

有川にすげえ見られてるんだが。

朝機嫌良かったよな？

約束のブツ渡せば良いのか？

「有川おはよう……………いつものだ。」

俺はイチゴ牛乳を3つ渡さす。

「あんがと……………何？その荷物？」

「それは……………」

教えたらずい気がする。

「それはお泊りセツトネ！」

「はあ？お泊りセツト？」

「そうネ！ソウスケは今日から私の家にお泊りネ！」

「えつちよつ！」

「言いやがった!？」

カユウ何を考えてやがる！

というか声がデカい！

胸も…じゃなく！

どうするこの状況、周りからも注目されてるし！

「はっ？えっ？ええっ!？」

「どうしたカ？姫。(戸惑ってて可愛い。どう返してくる?)」

「板倉！どういう事よ！」

「そつそれはだな…望海が」

俺は有川の反応を見ながら説明する。

「望海ちゃんが実家行くのは知ってたけど！

どうして板倉がカユウの家に泊まるのよ！」

それは俺も思うよ有川。

「姫、嫉妬カ？」

「ちっ違うし！ 訳わかんないんですけどっ！」

「本当カ？（からかうの楽しいわ。）」

「……………も……と……………る……………」

「え？」

「ン？」

「私も泊まるって言ってるの！ 文句ある!? アンタ等も見てんじゃないわよ！ 撃つわよ！」

有川が教室の皆に言い放つ。

「もっ文句ないネ！ 喜んでくるネ姫！（あっやり過ぎたわ。まあ、楽しくなるからいいか）」

「おっおう」

マジかよ……………どうしよう

年頃の男には嬉しいと思うイベントだが有川とカユウだぞ？

この組合せは混ぜるな危険だ。

「はあ……………憂鬱だ。」

普通の授業が終わりあつという間に訓練の時間になった。

「それじゃソウスケ！姫！終わったら連絡するネ！」

「ああ、わかった。」

「ん。また」

俺と有川はカユウと別れ強襲科に向かう。

「強襲科」

「全員揃ったなあ〜……篠原はそうか〜今日休みやあつたあ〜

……今日は射撃訓練やあ〜皆準備せえ！」

獅子堂先生が皆に号令する。

「有川あ！板倉の腕見てやれ〜」

「はあ!?!なんで私がまたっ！」

「有川あ〜」

「はい！わかりました！………板倉！早くしろ！」

怒ってるし………カルシウム足りてるか？

「板倉あゝ」

「はい！」

「その得物改めて見るとかつこええなあゝ大事にせえよゝ2丁共なあゝ」

「はい！ありがとうございます！」

デザートイーグルとベビーイーグルを褒められた何か嬉しいな。

「板倉！遅い！」

「ああ！今行くよ！」

俺は有川がいる所へ走る。

「じゃ、まずワンマグ分の的を撃ちなさい。」

「ああ、わかった。」

俺はベビーイーグルをホルスターから抜き手にもつ。

マガジンを入れセーフティーを解除して構える。

ベビーイーグルの装弾数は16+1だ。

16発何回的に当たるか。

<<<タアン！タアン！タアン！>>>

「3発中1！もつと良く狙え！」

「ああ！」

<<<タアン！タアン！タアン！タアン！>>>

「4発中2！あんま変つてない！次！」

<<<タアン！タアン！タアン！タアン！タアン！>>>

「5発中2！落ちてる！もつと見ろ！」

くっ難しいな。

良く見て……………

<<<タアン！タアン！タアン！タアン！>>>

「4発中3！計、8発命中！アンタ良く見てんの!？」

「見てる！」

「ブレも目立つし！いい？良く見てなさい！」

有川は太股のホルスターからグロック18cを取り出しマガジンを装填。

有川の使つてるグロック18cの装弾数は19+1発。

「しっかり構えて！反動を抑える！」



「3分休憩したら次やるわよ！」

「了解！」

こうして今日の射撃訓練が終了した。

## 第9話

「外」

『カユウ終わったぞ。』

俺と有川は訓練が終わった為、カユウに連絡する。

『何処で待てばいい?』

『二人共お疲れさま。校門の前で待ってて。』

『了解待ってる』

「ほら、行くわよ。」

「ああ。」

校門へと向かう。

「二人共お待たせネ。」

カユウが車で迎えに来てくれる。

「先に姫の家に向かうネ。」

「ああ。」

「すぐ支度するから。」

車に乗りこむ。

「さて、行きましようか。二人共暑くない？クーラーつける？」

普通の口調に戻したカユウが聞く。

「いや、大丈夫だ。」

「私も大丈夫。」

「そう、なら良かったわ。少し飛ばすから気をつけて。」

「法定速度は守ってくれよ。」

「わかってるわ。」

「え？マジ？飛ばすの？きやつ！」

スピードがどんどん上がっていく。

「ちよっ!?本当に守ってる!?!」

「大丈夫、大丈夫。ギリギリよ。」

俺はカユウの運転に慣れてるが有川は慣れてないらしい。

「板倉！アンタも何で平然としてるのよ！」

「双介は慣れてるから。」

「慣れてるってきやつ!?!」

「着いたわよ姫。」

急ブレーキをかけ有川の自宅に着いた。

「ごっつ5分待ってて。」

有川は自宅に入っていく。

疲れてる様に見えたが気のせいかな。

「双介、今日のお泊り楽しみね。」

「そっそうだな。」

「これから地獄の空間にはいけないといけないのか。

忘れてた。」

「どうしたの？ 訓練疲れた？」

「いっいや問題ない。」

「そう？ 何かあるならすぐ言ってね。」

「ああ。」

「お待たせ！」

「荷物トランクにいれてね。」

え？ 量多くないか？

何日分あるんだ？

「何よ板倉、ジロジロ見んな変態。」

「いや、普通に荷物多くないか？」

「は？このくらい普通よ普通。ね？カユウ」

「そうね、これくらい普通よ。」

「そうなのか。」

「そういう物なのか。」

望海は少なかつたと思うが。

「しつかり捕まってるね。」

「また飛ばすの!？」

「勿論よ」

「きやつ!？」

カユウがアクセル全開で車を走らせた。

「カユウの工房」

「ふう、着いたわ。」

俺達はカユウの華麗なるドライブであつという間に工房に着いた。

「双介、姫。ごめんね今日、お店開けないといけないの営業終わってから、夕食でも大丈夫？」

「俺は大丈夫だぞ。」

「私も問題ない。」

「なら、良かったわ。着替えてくるからリビングに行つてのんびりしてて、飲物とか自由に飲んでね。」

「ありがとな何か手伝うか？」

「大丈夫よ。ゆっくりしてて。」

「そっかそれじゃな。」

「んじゃ。」

「あつ待つて姫。」

「ん？何？」

「あつ双介は先に行つててね！」

「了解」

どうしたのだろうか。

あの二人喧嘩しないよな。

大丈夫か？

「んで何よ？」

「リビングでおっぱじめないでね。する時は部屋でっ」

「誰がするか！人をビッチみたいに言うなし！」

「一応言ってみただけよ。望海ちゃんいないからチャンスよ姫。」

「うっさい！アンタそんな事言う為に呼びとめたんか！」

「ごめんごめん。夕食の仕込みをして欲しくてお願いできる？」

「了解。最初からそう言えっの。」

「でもチャンスよ？」

「しつこい！」

「ごめんって。今日は鍋にしようと思ってるの食材は冷蔵庫にあるから！」

「ん。じゃ、やってくる。」

「お願いね！……………素直じゃないんだから。さて、着替えますか。」

「リビング」

「ふう、相変わらず凄い家だよな。」

1階がお店で地下に工房とリビング、部屋が2部屋ある。

「リビング広いし。ふあ〜」

荷物を置きのんびりしていると有川がきた。

「板倉アンタ手伝え」

「何をだ？」

「夕食の仕込み！今日は鍋だつて。」

「わかった。何をすれば良い？」

「アンタは野菜のカットをやつて。私は肉のカットと出汁をつくる。」

「了解。少し待つてくれ着替えるから。」

「ん……………私も着替えてくる。のぞいたら殺す。」

有川は荷物をもってカユウの部屋に入つていった。

俺はリビングで良いか。

お泊りセットを開ける。

「色々あるな……………トランプにオセロ、ゲーム機まで望海、俺は子供か。」  
半分修学旅行みたいな感じの荷物だ。  
とつとつと、着替えんと有川にどやされるな。

「あつ 姫あ とつ！」

「え？」

「双介？……………あらやだ。」

「……………頼む後ろ向いてくれ。」

パンイチの姿をカユウに見られた。

「……………終わったぞ。」

「ごめんなさい……………」

「いや大丈夫だ……………大きな……………」

「やだ！ 双介のエツチまた胸ばっかり見て！」

どうして俺が言われる？

先に見られたの俺だぞ？

カユウの仕事着はチャイナ服だ。

髪はいつものお団子ヘアに青いチャイナ服だ。

胸が大きいから強調されてる。

サイズあつてるか？

「そもそもチャイナ服は太股が魅力的なの！見るなら胸以外も見て！」

「すまんだがな！男はっ!?!……………いてえ」

「おい何をしてる？変態」

丸められた新聞紙で有川に叩かれた。

「で？男は何だつて？」

「いえ何でもないです！はい。」

下手な事を言つて叩れたくない。

男は皆そうつて言いたかったけどな。

「カユウはなしたのよ？」

「あつそうそう！お米も多めに炊いてほしくて。」

「了解。さつさとお店開けな、じゃないとコイツいつまでもアンタの胸見てるわ。」

「双介の馬鹿……………何かあつたら呼びにきてね！」

カユウはお店の方に登つていった。

「ほら、さつさと手洗う！」

「了解！」

有川に怒られながら俺は手を洗う。  
これ以上怒らせたらヤバイな。

「ん」

「ありがとう」

有川から野菜を渡された。

さてと、何から切るか。

無難にネギからにするか。

「なあ、有川」

「何よ」

「何人前あるんだ？コレ？」

「7人前」

「多くないか？」

「普通よ」

「そつそうか。」

7人前って普通なのか？

俺と望海で3人前で丁度なんだが。

有川もカユウも大食いだったか？

にしても良く冷蔵庫に入ってたな。

「なあ有川」

「何！」

「似合ってるぞエプロン姿」

「うっさい！黙って野菜切れ。」

髪をポニーテールにして猫が描かれてるピンク色のエプロンだ。

普段とのギャップが凄い。

黙々と作業を続けた。

「うし……………板倉味見」

「俺でいいのか？」

「早く」

「……………少し薄いかな？」

「わかった。これでどう？」

「丁度良い」

「そっ……………」

「これで終わりか？」

「うん」

「なら上に行っても良いか？」

「カユウの胸を見に？」

「ちげえよ！射撃場に行たいだけだ。」

「どうだか………現に私を見るじゃない」

「有川が寄せて見せてくるからだろ！」

「変態板倉」

「うるせえ！もう行くからな。」

「あーはいはい。」

俺は二階のお店へと登っていった。

「カユウとサイズ一つしか変らないのに………どうしたら良いのかな………露出か………」

「よつ繁盛してるか？」

「ソウスケ、ぼちぼちネ。どうした力？」

「射撃場使つても良いか？」

「大丈夫ヨ。弾薬足りる力？」

「そんなに撃たないから大丈夫だ。」

「他のお客さんもいるから気をつけるネ。」

「了解」

「サテ、お仕事ネ」

「カユウサイド」

双介も頑張り屋さんね。

ますます好きになりそう。

姫が泊まるのは誤算だったけど楽しいから良いかな。

「何してんの？」

「姫!?驚かささないでよ……………」

「普通に声かけたただけだし。」

「そつソウネ普通だったネ。」

「で?今何してんの?」

「取引メールの確認ネ」

「ふーん。」

姫は私の隣に椅子を持ってきて座る。

「姫、一応ココ従業員しか駄目ネ」

「別に良いでしょ」

「ハア、かまわないネ。お客さん睨まないデネ」

「わかってる。」

「というか姫、何ヨその格好」

露出が高い私服になってるし、少しイライラしてるわね。

「普通よ普通。」

「……………何したカ?」

「……………板倉をからかったら拗ねた。」

「素直じゃないネ。」

「うっさい……………」

「姫も拗ねてどうするネ」

「ふん……………」

本当、素直じゃないお姫様ね。

まあ、そこが可愛いのだけど。

お仕事お仕事

「…………銃のレート上がってるネ…………可笑しい……………」

値上がりする時期ではないはず。

問い合わせてみようかしら。

「姫、電話するからお客さんきたら頼めるか？」

「ん、わかった。」

このメーカーの番号は

「……………………お世話になってるネ。銃の件で相談があるヨ……………は!?! 契約取消し!?!ちよつと……………」

電話を切られた。

一体どうして何がどうなってるのよ。

「カユウどうしたのよ？ 大声だして。」

「なつ何でもないネ！ (後で話すわ)」

「あつそお客さんくるわよ (了解)」

私はアイコンタクトで姫に伝える。

「いらつしやいませネ！ ごゆつくりネ！ 姫も言うネ」

「ええ〜……………いらつしやませ♪」

「……………」

「何よ」

「あえて何も言わないネ」

そんな声聞いたの久し振りだわ。

入学の時以来かしら。

「ふう〜終わったネ」

お店を閉めシャッターをおろす。

「お疲れ」

「姫もお疲れさま、手伝ってもらってごめんね。」

「別に泊まらせてくれるしこんぐらい」

「それにしても接客上手いわね。」

「別に普通だし。」

「メイド喫茶とか似合いそうよ?」

「ストレス溜まるからパス」

「あら、そう。双介遅くないかしら?」

「確かに。」

「すまん、遅くなった。」

「何かあったの? 双介。」

「いや、夢中になってた。」

「あらそうなの。」

「双介サイド」

「で？スコアは板倉」

「スコアは……………」

有川何でこんな服装なんだ。

「何よ……………変態」

「そういう格好の有川が悪いだろ！」

「あ？板倉の癖に！」

「やめっ首締まる！胸当たってるって！」

「胸、胸ってそんなに良いんか！このムツツリおっぱい星人！」

「くつくるしい！」

「姫、そのくらいにしときなさいな。お腹空いてるしご飯にしましょ。」

「ちっ命拾いしたな板倉」

「はあっはあっ助かった。」

「ほら二人共早くリビングに行きましょ！」

「わかったから押すなってカユウ」

「ちよつとカユウ何処触ってんのよ！」

「お尻よ姫、安産型ね。」

「このセクハラおやじ！」

カユウに押されながらガヤガヤとリビングに降りていった。

「リビング」

「姫、双介仕込みありがとうね。」

「こんなんの良いの？」

「ええバツチリよ！今準備するわね！」

「それより先に着替えてこいつての。板倉と準備しとくから。」

「ありがとすぐ着替えてくるわね！双介覗かないでね見るなら堂々とっ」

「はよいけ！この痴女！」

「痴女じゃないわよもう」

カユウは渋々部屋に入る。

「板倉！皿とか用意しろ！」

「了解」

「覗くなよ板倉」

「俺を何だと思ってるんだよ。」

「ムツツリ変態巨乳好き。」

「ちげえよ！」

「くだらん事言つてないで手を動かせ！」

先に言つたの有川じゃねえか。

言葉に出せないのので心に止めておく。

「野菜運べ板倉」

「はいよお姫様」

「あん!？」

おお、怖。

すぐ怒るな有川。

「ほら、皿も並べろ」

「わかつたよ。」

言われるがままにお皿を並べて準備を整えた。

「お待たせ、姫、双介」

着替え終わったカユウが部屋から出てくる。

「何よその格好寝間着？」

「部屋着よ可愛いでしょ？」

「そつそうだな。」

「何よ？変かな？」

「パンダのキグルミみたいな格好は変でしょ？」

「変じゃないわよ可愛いでしょ、もう。さあ、食べましょ！」

鍋ができるまで俺等はだべったのだった。

「「いただきます！」」

「板倉、ご飯どれくらい食べる。」

「中盛りで」

「カユウは？」

「特盛りでお願い。今日は沢山食べるから！」

「はい。バランス良く食べなさいよ二人共。」

「姫、何だかお母さんみたい。」

「誰がお母さんか！」

「この肉美味しいな。」

野菜も染み込んで美味い。

有川が作った出汁がとてもあう。

「うくん♪美味しい♪姫に頼んで正解だったわ！」

「マジで美味しいぞ！有川！」

「ほっほめても何もないわよ！」

「え？サービスシーンとかないの？ハプニングとか？」

「何、訳わからん事言ってるのよカユウ……………つたく」

「あつ有川？」

「なに？」

「一味かけ過ぎじゃないか？」

「はあ？普通よ。」

よそつた鍋がみるみる赤くなる。

「ひっ姫？食べれるの？」

「???当たり前よ。」

訳が分らない顔をしてる有川。

それをしたのは俺達なんだが。

「姫？味覚か痛覚おかしくなってるない？」

「両方共、正常よ……………うん美味しい」

美味しいのか？

むせないか？

「そっそう。なら、いいわ」

「変なの……………」

変なのは有川ではないのか。

こうして楽しい鍋を食べ終わるのだった。

## 第10話

「はあく美味しかった。」

「本当に美味しかったわ。ありがとね、双介、姫。」

「こちらこそ食材ありがとな。こんなに使って大丈夫だったか?」

「ええ、大丈夫よ。望海ちゃんが食費渡してくれたの、私はいらないって言ったんだけどね。」

「そうなのか?」

「ええそうよ、双介君が迷惑かけるからって言ってたわ。」

「板倉がいるだけで迷惑よ」

「私はそうは思わないけどね」

「食費たりるか?」

「大丈夫よ。明日は何食べたい?」

「俺は何でも大丈夫だ。」

「そう? 姫は?」

「包み焼きアボカドレタスハンバーガー」

なんだその食べ物聞いた事ないぞ？

「え？何それ？私聞いた事ないわよ？」

「検索したら出るっての。コンビニにも売ってる。」

「そっそうなの（姫変った物好むわね。）」

「何よ？」

「何にも言っていないわ。そうカリカリしないで」

「してないし。」

有川は不機嫌そうに携帯を見る。

情緒が分らない。

「なら良かったわ。コンビニ行こうと思うのだけど来る？」

「行こうかな。有川は？」

「ん」

はいはい行くなって事か。

「つてかその格好で行く気？カユウ。」

「そうだけど変かしら？」

「パンダの格好はどう考えても変。はよ着替えてこい。」

「ええ、可愛いのに、良いじゃないコンビニ行くだけなのに」

「はよいけ、尻軽痴女」

「そこまで言わなくても……………」

「なら普段から気をつけろっての。」

カユウは部屋に着替えにいったのだった。

「板倉」

「ん？何だ有川？」

「銃忘れるなよ（何か嫌な予感がする）」

「了解」

俺達武偵は何があるか分らないからな。

準備を万全にしとかなければ。

「お待たせ、この格好なら大丈夫でしょ？姫。」

「いつもよりはマシ」

「もう！何なら良いのよ、あつ待っておいでいかないでよ！運転するの私なのに、双介

までっ！もう」

カユウはプンプンしながら俺達の後を着いてくる。

〔駐車場〕

「全く二人して酷いんだから！」

「すまんすまん」

「ふん………カユウ鉄扇は？」

「勿論持ってきてるわ。あと、デリンジャーもここに。」

谷間からデリンジャーを取り出し見せる。

アニメ以外でやる人初めて見た。

「つてえ」

「鼻の下伸ばすなつての。カユウ、アンタそれぞれにしまつて大丈夫なの？」

「大丈夫よセーフティかけてるし谷間にホルスターもあるから。」

そんなの存在するのか知らなかった。

「あつそ。ほら早く運転して」

「姫が聞いたんじゃない。」

カユウは車のエンジンをかけ車を走らせた。

「コンビニまでは車で7分くらいかかる。

「ねえ、姫」

「何？」

「険しい顔してるけど車酔いした？」

「他の車のライトがまぶしいだけ。」

「そう？具合悪くなったらすぐ言ってね」

「ん」

「有川大丈夫か？」

「ん」

「そっか」

話かけるなど感じて返事された。

「カユウ」

「どうしたの姫？」

「ファルマじゃなくてローサンが良い。」

「ええ!?!この付近のローサンだと20分かかかるわよ?」

「ローサンじゃないと欲しいの無い」

「わかったわよ……もう我儘なんだから。(で?姫何なのよ?)」

「うっさい（不審な人影が一瞬見えた。）」

「はいはい悪かったわよ（ええ!? 私にはわからなかったわ。）」

「板倉! 後ろから私の鞆とれ。（一瞬だけよ。飛ばせる?）」

「鞆? わかった………うわあ! 飛ばすなら言ってくれよ!」

「ごめんね! 双介、トイレ急いでいきたくて!（割りマジ）」

「板倉、鞆!（出る前にいけての。）」

「ほらよ」

「ん」

「んだけかよ。」

「何だ二人の様子が変な気がするな。」

「勘違いか?」

「更に飛ばすわよ! 捕まってる!」

「法速度守ってくれよ!」

「勿論!」

車のスピードがグングン上がる。

「ローサン」

あつという間にローサンに着いた。

そんなにトイレ行きたかったのか？

「トイレよるから先に買う物カゴにいれてて！」

カユウは小走りで中に向かう。

「板倉、このメモに買いてあるの買っておいて。車酔いしたから外の空気吸ってる。」

「わかった。大丈夫か？水とか先に持ってくるか？」

メモを受けとる。

「大丈夫。心配どーも。」

「具合悪い所すまんがこの『ゴム』ってアレの事か？」

「へやゴム！この変態！」

「すつすまん。」

理不尽だ。

きちんとへやゴムって書いてくれよ。

「姫サイド」

「つたくあの変態は。ふう〜」

マジで車酔いするとは思わなかった。

運転荒らいのよカユウは。

それにしても板倉の奴普通女子に聞く？

そういうのは男が用意するでしょ。

まあ、女も持っていると思うけどさ。

「つて！違う違う！」

考えてる場合じゃない。

怪しい人影は途中から居なくなっただけど念のため周りを見とくか。

「あつヤバ」

適当に書いたメモだから変なの書いたかも。

「カユウサイド」

「間に合った」

目的地変更すると思つてなかつたから危なかつた。

怪しい人影か………双介は気づいてなかつたし私もわからなかつた。

流石、Aランク武偵ね姫。

「ん？あれは？」

双介が困つた顔をして紙を見つめてる。

「どうしたか？双介？」

「カユウ、その有川が具合悪いからメモに書いてある奴買つてこいと頼まれたんだが物

はわかるんだがその………」

「そうなの？どれどれ………ああそれね。任せるネ」

姫、双介に何て物頼んでるのよ。

生理用品を双介に頼んじや駄目じゃない。

「これで安心ネ」

「すまん助かる。」

「後は何アルカ？………え？ゴム？ゴム!?ごほん。」

私の家でおっぱい始める気!?

冗談だったのに!?

ってか私は!?!目の前でするの!?

え?ええ!?

「それはヘヤゴムらしい。」

「へっ!?!そっそうアルカ?驚いたネ。ハハハ。」

ならヘヤゴムって書きなさいよ!

色々考えたじゃない!

絶対適当に書いたでしょ!

全く姫ったらこういうのは良い加減なんだから。

「うわ……………本当にあるんだ。」

「みたいだな。」

双介はあんまり驚いてなさそうね。

包み焼きアボカドレタスハンバーガー、正直言っただけしか食べないと思ってた。

コンビニにあるって事は需要あるのね。

姫見回り大丈夫かしら?

「姫サイド」

「さてと戻ってくる前に見回りを終わらせないと。」

見た感じコンビニの周辺は怪しい奴はいなさそうね。

あとは……………あの公園が怪しいな。

カユウに連絡いれておこう。

『カユウ』

『どうしたの？姫』

『コンビニの周りを見たからは公園見てくる。』

『わかったわ！買い物終わったらそっちに向かうわ！』

『ん』

「さていきますか」

銃のセーフティを外し公園に向かう。

ぱっとみ、人はいなさそうに見えるが。

気配はある！

「出てきなさい！武偵よ！」

【それで出てくる者は愚か者でござる。】

姿は見えないが声が響く。

この響き方からすると上にいるな。

木の上辺りか？

「私達をつけていたのはアンタだろ！何が目的だ！」

【答える奴は愚か者でござる。】

「答える気はないか……………なら。」

<<<パン！パン！>>>

【そんな豆鉄砲無意味でござる。】

「ちつくそっ」

暗くて良く見えないのに相手にははつきり見えてるのがこんなにも厄介だとは。

【反撃でござる。】

「はっこんなもん」

クナイが私目がけて飛んでくる。

「当たる訳っしまっ？」

クナイはプラグ!?

液体がついていた。

毒!?

【安心なされよ毒ではないでござるよ耐性があればの話でござる。】

「はあつはあつ暑い……んっ……………」

身体が段々火照つてくる。

これはまさか……………媚薬？

「くっ……………あっん……………くそっ……………ひゃっん…」

耐性つてこういう事だったの。

駄目効き過ぎてる。

私……………もう……………

「カユウサイド」

「遅いわね〜」

姫から連絡もらつてはいるけど。

〽〽〽パン!〽〽〽

「!?銃撃か!？」

双介が驚く。

「公園の方からね!双介!」

「ああ!」

私と双介は公園の方向へ向かう。

間違はなくこの銃声は姫のグロツクね。

大丈夫なのかしら?

「はあっはあっ姫!」「有川!」

私と双介は公園につき、地面に倒れこんでる姫を発見する。

「姫!?大丈夫!」

「……はあっ……あっ……まだっ……敵がっ……んうっ／／……」

「え?敵?」

「カユウ!避ける!」

「!!」

私は双介の声で反射的に避けた。

【ほう今のを避けるでござるか。】

「カユウ！有川を連れて逃げろ！時間稼ぎぐらいできるー！」

【ふむ一瞬でござるよ。】

「そうかよ！」

＜＜ダン！ダン！＞＞

双介がベビーイーグルを抜き敵に射撃する。

「姫、行くわよー！」

「ちよっ……まっ……あんっ／＼／＼」

「え？ええ？」

姫の身体に触れた瞬間、可愛いらしい声を出す。

「んうっ……あつあ……はあつ……媚薬っ……もらっ……れっ………たっ……」

「うそっ!!?どうしようっ」

媚薬の解毒なんて知らないし、このままじゃ。

「くそっ当れ！」

<<<ダン！ダン！ダン！ダン！>>>

【無駄でござる。】

「まぶっ!?!くっ!」

閃光の弾が地面に着地し光耀いた。

【これで二人目でござる。さて】

敵が姿を現わしカユウ達の方へ。

「双介!?!来ないで!」

私は谷間からデリンジャーを取り出し銃口を向けた。

【そなたに用があるのでござる。】

「きゃっ!?!」

デリンジャーを取り抑えられる。

【そなたが抱えてる武器全て渡すでござる。】

「武器を? 渡す訳ないでしょっ! 目的は何!」

なんとかして鉄扇を。

【そうはさせんでござる。】

鉄扇をはじき飛ばされた。

「貴方達は何者！」

「それは黙秘でござる。さあ、我等に武器を！」

「誰が渡すもんですか！正体不明の奴等に！」

「それは残念でござるな。ならこの媚薬を使って弄んだ後にいただこう。」

「いついやあ！やめっ」

「クククク。楽しみでござるな」

「いやっいやあっ！」

「これで終いにつ何者!？」

『その手を話すでござるよ外道！』

「その声……………まさか……………」

男の手が離れる。

『怪我はないでござるか？カユウ。』

「おっ……………お兄ちゃん……………」

嘘、本当にあの人が。

## 登場人物紹介 1

名前：板倉双介（いたくらそうすけ）

年齢：16

性別：男

好きな食べ物：肉じやが

嫌いな食べ物：納豆

使用武器：デザートイーグルブラック，ベビーイーグル

所属学部：探偵科↓強襲科

武偵ランク：E

本作の主人公で東京武偵高の1年。

落ちこぼれの武偵でクラスではかなり当たりが強い。

元々は普通の学校に通う予定であつたが訳あつて東京武偵高に慣れない武器と環境のせいかなかなか昇格できない。

幼馴染みの望海と同棲している。

とあることがきっかけで強襲科に転科することになる。  
望海、カユウ、姫とよくつるんでいる。

一見ハーレムに見られるが尻に敷かれていてよく苦勞をしている。  
勉強はそこそこできるらしい。

刀がトラウマで扱うことができない。

名前：篠原望海（しのはらのぞみ）

年齢：16

性別：女

好きな食べ物：オムライス、プリンチーズケーキ

嫌いな食べ物：なし

使用武器：日本刀 月龍

所属学部：強襲科

武偵ランク：A

双介の幼馴染みで東京武偵高の1年。

実家がお寺で家の命令で武偵をしている。

基本は世話焼きな性格。

家事全般をこなし双介を甘やかす。

自分がお寺もあつて日本食を好んで食べている。

優秀な武偵ではあるが戦闘狂であり、いつもやりすぎてしまう。

パートナーの姫はいつも後始末をしているらしい。

忘れられがちだが、これでもお嬢様。

本気になると巫女装束を着る。

胸はE

名前：リン・カユウ

年齢：16

性別：女

好きな食べ物：チョコ肉まん

嫌いな食べ物：ねばねば系

使用武器：鉄扇、デリンジャー、護身術

所属学部：装備科

武偵ランク：C

双介と同じクラスで日本人と中国人のハーフ。

弾薬などの装備を売買しており武偵高の近くにお店を持っている。

ある事情でキャラ変をしている。

普段は大人っぽい感じである。

運転はとてもしスポーツ向き。

本人曰く戦闘向きではなくあくまでサポート側。

結構、大食いらしい。

胸はG

名前：有川姫（ありかわひめ）

年齢：16

性別：女

好きな食べ物：ハンバーガー

嫌いな食べ物：キノコ

使用武器：グロツク18c、格闘

所属学部：強襲科

武偵ランク：A

双介と同じクラスの女子でクラスの中心的存在で委員長をつとめる。

いわゆるギャルと呼ばれるが本人は否定している。

双介に対して当たりは強いが会話？はしてくれる。

双介が大好きだが、素直ではないためツンケンしている。

なんだかんだで、最後まで面倒を見る性格。

望海の尻拭いを毎回している。

優秀なAランク武偵であるので周囲からは人気である。

弟が居て、激愛している。

変なものを好んで食べる。

胸はF

## 第11話

「カユウサイド」

「おっ……お兄ちゃん……どうして……」

『妹のピンチに来るのは当たり前でござるよ。拙者だけじゃなく』

【くっ!?!】

「ちっ避けたか。」

「望海ちゃんまで!？」

「カユちゃんごめんね遅くなった!」

【何者!?!】

「貴方なんか話してないけど。まあ、武偵高校一年！篠原望海!」

『同じく一年！竜胆有飛（りんどうゆうと）!』

『「仲間を助ける為に!いざ!参る!」』

「双介サイド」

「つう〜」

やっと目が見えるようになったか。

「状況は……望海と……誰だ?……」

もう一人、武偵がいるが正体がわからん。

俺も加勢しないと!

「望海! すまん!」

「双ちゃん! 目大丈夫?」

「ああなんとかな」

『双介氏〜無理は禁物でござるよ〜』

「は? えっ? 有飛!? 何だよその姿!」

俺がいつも見てる有飛とはかけ離れ、凄く痩せててイケメンになってる。

『はっはっはっ。詳しい話は後で! 双介氏これを姫に! 媚薬の解毒薬でござる!』

「あっああ!」

戸惑いながらも薬を受けとり、有川の元へ。

「有川! 打つぞ」

「いつ……いた……くらっ……見ないでっ……あっ♪……くうっ……」

「すっすまん!」

薬を打ちこむ。

「あああああんっ……………ふう……………ふう……………後で殴る……………」

「いやっ俺は悪くないだろ」

「うっさい死ね!で、敵は?」

「望海と有飛が相手してる。」

「はああ!?キモオタが!?なんで!?意味わかんない!」

「俺もだよ。カユウ大丈夫か?」

「へ?うっうん大丈夫よ。」

「そっか」

様子が変だな。

『カユウ!二人を連れて車に行くでござるよ!早く!』

「うっうん!わかったわ!お兄ちゃん!」

「お兄ちゃん!」

「とっ兎に角!車へ行くわよ!」

「望海&有飛サイド」

「これは後で説明が大変でござるな〜」

「まあ、無理もないよ有飛君。姫ちゃんが特に大変だよ〜」

「参ったでござるな〜」

「くっ!? 貴様等! 邪魔をしようて!」

「有飛君」

「御意……………同じ忍者として外道は叩きのめす! でござるデユフフ」

「有飛君。キャラ崩壊だよ」

「くっ!? 拙者の速さに追いつくとは!」

「このくらい朝飯前でござる!」

クナイ同士のぶつかり合いが繰り広げられる。

「速い速い〜有飛君〜助けいる?」

「望海殿〜そんな殺生な〜」

「冗談だよ。……………さあて! 行くよ “月龍”」

「ぬ! (この殺気は “アヤツ” に似ておる。)」

「おじさん避けないでよ〜。せい!」

「くっ!? (コヤツも拙者の速さに)」

「有飛君くどつちが先にやるか勝負ね！」

「望海殿く殺生は御法度でござるよつと！」

「ええく腕一本！」

「駄目でござる。」

「じゃ、足？」

「望海殿く真面目にく」

「はあい。」

【ぬうつ（コヤツ等どんどん速度が速く!?!）】

「五体満足つて難しいくありなら一瞬なのに。」

「どつちが悪かわからなくなるでござるくAランク怖く」

「……………真面目にやるよ、もう。」

【ならば！】

大量のクナイの雨がふりそそぐ。

「せいやっ！」

【んな？拙者のクナイが！】

望海は刀で全て無力化する。

「流石、望海殿く」

「私一人に押しつけないでよ………決めるよ」

「承知………忍法！疾風刃！」「疾風月龍斬！」

二人の風の刃が忍者男を遅う。

【ぐう!?不覚】

「大人しくお縄に………逃げられた。」

「変わり身の術でござるからダメージは喰らったみたいでござるなく」

地面に落ちた血を見て言う。

「ねえ有飛君♪」

「何でござるか？」

「しよ？」

「嫌でござる！死にたくない！」

「ええく消化不良く」

「皆の所に行くでござるよ………超特急暴走機関車………」

「了解くえ？今なんて？」

「逃げるが勝ちでござる！」

「あつ！姿消すの反則！見るのキツイのに！」

「普通は見えないんでござるよ!!」

「待ってよ〜」

「双介サイド」

「それで一体どういう事よ!?!」

「駐車場についた途端、有川が聞く。

「えっと……………その……………私……………」

「まあ有川、落ち着けて」

「ちっ」

「ごめん姫……………」

「はあく。んで買った物は？」

「えっあつ車の中……………」

「板倉!ハンバーガー」

「へいへい」

俺は車の中にあるハンバーガーを取り出し有川に渡す。

「あんがと」

「いってえ！何すんだよ！有川！」

「後で殴るって言ったし。」

確かに言ってたけども。

手加減してくれよ。

理不尽だ。

「はあく。カユウお茶」

「うっうん」

うちのお姫様は完全に女王様になったな。

「んで、私達は望海ちゃんがくるまで待つてればいいのか？」

「うっうん……………」

「…ったく…………怒ってないからオドオドすんなし。」

「ごっごめっ」

「だからっ」

「あー姫ちゃんがカユちゃんをイジメてるくお兄ちゃんの出番かなー？」

「望海殿、火に油を注がないで欲しいでござるよ。」

望海と優飛が俺等の元へ戻ってくる。

「取り敢えず、移動しよ？お話はそれからしよ？」

望海が提案する。

「そうだな何処に移動する？」

「それはカユウの家でいいでござる。」

「えっ!?お兄ちゃんもくるの？」

「拙者も居ないと説明できないでござるよ。」

「それはそうなんだけどでも」

「は？何か不都合ある？キモオタが居るのが？」

「恥ずかしい……………」

「はあ!?何よそれ？」

「有川このハンバーガー美味いな」

「でしょ!……………ごほん!勝手に喰うな板倉!」

「もう双ちゃんつたらお腹壊すよ」

「望海ちゃん!?何よそれ!普通のハンバーガーだし!」

「姫ちゃんくらいしかいないよ!変な味好むの」

「いたって正常だし!普通の味だし!望海ちゃんも食べたらわかるって!」

「さーてカユちゃん運転お願いね。」

「うん……………」

俺達はカユウの車に乗り移動

〔車内〕

運転手—カユウ

助手席—優飛

後部座席—有川、望海、俺の順に座っている。

「姫ちゃん夜ご飯食べたんじゃないの？」

「食べた。」

「また太った〜って言っても知らないよ〜」

「運動するし。」

「なら良いけど〜。もう！双ちゃんも夜ご飯食べたでしょ！」

「でも望海、腹減ったし。」

「え!?!双介沢山食べたじゃない！」

「いやっ有川よりは喰ってない！」

「はあ???板倉も同じぐらい喰ってたし！」

「一味だか七味だか沢山かけてただろ！」

「賑やかでござるな〜」

「一味だし！キモオタ笑うな！カユウも同じ量食べてたし！」

「私は普通よ！」

「姬ちゃん！また変な食べ方したの!?!」

「あつヤバっ違うのよ！望海ちゃん！普通の量の一味をかけただけ！」

板倉が過剰表現しただけよー」

「いや！半分ぐらいかけてたな。」

殴った仕返しだ。

「板倉っ！（絶対泣かす!）」

「ひーめーちゃん〜」

「いやっそのつえつと……………」

世にも珍しい有川の焦り様。

ふっ勝った。

「いつも言ってるでしょ！変な食べ方しないのって！わかる？身体壊すんだよ？」

望海の説教が車内に響くのだった……………

「カユウの自宅」

「車止めてくるから先に入ってて！お兄ちゃん鍵お願い」

「承知でござる〜」

「う〜ん眠たーい」

望海が背伸びをする。

「……………」

有川は少し落ちこんだ顔をしている。

やり過ぎたか。

「……………」

「つつ」

有川に蹴られた。

まだやる気なのか。

「どうしたの？双ちゃん？」

「何でもないぞ、うん。」

「皆入るでござるよ」

鍵を開けた優飛が声をかける。

俺達はカユウの家に入る。

「皆、お待たせ……………えっとどう説明したら良いかな……………」

「まずは、私と優飛君が助けにきた経緯から言うよ。」

私は数日前に優飛君から依頼を受けたの。」

「依頼？そもそもキモオタのコレ知ってたの？望海ちゃん？」

「うん、知ってたよ。入学当初からね。」

「そんな前からか？」

「そうだよ。まあ、ただならぬ感じだと思って出逢いがしらに切りかかったら、

オタクっぽい太った優飛君に避けられてね。」

「あの時は死にかけてたでござる。」

「私は不思議がってたら2、3日待ってくれて言われて

「痩せた姿を見してくれたんだ。」

「え？望海ちゃんいきなり切りかかってこの姿のお兄ちゃんに逢えたの!？」

「うれ、それで真剣勝負して私の勝ちでそれからは色々情報とか提供してもらって

交流してたんだ。」

「拙者はもうごめんでござる。」

「二人の逢いはわかったけど、何でキモオタが痩せてるのよ!？」

「それは姫く秘密でござるよく」

「ああん!？」

「有川落ちつけて。」

「板倉!アンタは何も思わないの!？親友だと思つてた奴に隠し事されて!？」

「そつそれは」

痛い所つくな有川は。

正直シヨックではあるが俺等は武偵。

人それぞれ事情がある。

「それに関しては申し訳ないでござる。だが!決して双介氏を

騙しおとしいれようなど思つてござらん!」

「仮にそうなら私が優飛君を切り捨ててるよ。安心して双ちゃん。」

「俺は別に……ただ優飛がイケメンなのに驚いただけだ。」

「照れるでござるな〜」

「はあ？」

「姬ちゃん、ステイ」

望海が蹴とばそうとしてる有川をなだめる。

「少しの冗談でござるよ……ふう……拙者が望海殿に依頼した内容は

「カユウを悪意から守って欲しい」でござるよ。」

「悪意って何よ？」

「姫殿達がこの前、解決したショッピングモールの事件を動かしていた

組織でござるよ。」

「黒幕がいたのか!？」

「そうでござる。その組織がカユウの工房、輸入ルートを独り占めしようとした

情報があったでござる。なので望海殿に依頼したのでござる。」

「そんで？キモオタのその姿については？」

「これが本来の姿でござる。太った姿もでござるが。

太ってた方が都合が良いのでござるよ〜。」

「はあ？理由になってないし!〜」

「見て分る通り拙者は忍者の末裔でござる。」

「ふーんそんで？」

「この後はカユウ……………できるでござるか？」

「うっうん……………すっー……………」

幼い頃両親が再婚して…私と竜胆優飛は義理の兄妹なの…………。」

「そうだったのか……………」

「でつでも！カツコ良かったお兄ちゃんは中学の頃からぶくぶく太って！

あげくの果てに気持悪い趣味を好んで！

だから兄妹だと思われぬ様に偽名を使って入学したの！

喋り方も変えて！」

「気持悪くないでござるよ！」

「キモオタ……………黙れ」

「面目ない」

「それにママから武偵になると同時に商人になりなさいって言われて家を出てこうして

お店をしているの！なのにお兄ちゃんが好き勝手にして不満なの！

大好きなお兄ちゃんがあんなゴミになって！お店で苦労してるのに！

大丈夫の一言もないのにこうして助けにくるし！ほんとにつほんにつ…ひつく

……嫌い！……大嫌い！……うあーんっ……」

カユウの気持ち爆発し子供の様に泣きだした。

「カっカユウ！泣かないでくれ！お兄ちゃんが悪かったから！」

「うえーんっ……もう知らないもんっ……お兄ちゃんの……ばかあっ……」

「ちっ……板倉！キモオタ！外出てろ！」

「はい！」

有川に怒鳴られ俺と優飛は外に追い出された。

「うええええんっ……お兄ちゃんの……ばかあっ……ええええんっ……」

「カユちゃん泣かないで！はいティシユ」

「あゝりがと……望海ちゃん……ひっく……」

「はあゝアンタは泣き虫ね」

「だって姫え」

「うわっあ!? アンタまた鼻水つけて! 望海ちゃん! ティシユ」

「はいはい」

「ひつくひつく……姫えく……」

「ああもう! わかったから泣くなつて! 望海ちゃん! 風呂お願い!」

「だろうと思つてもうしてるよ! カユちゃんの事お願いね姫ちゃん。」

「言われなくても……ほら……頭撫でてあげるから……良い加減……泣かないの……」

「でもねつでもねつ……つく……すん……すん……」

「はいはい、わかったから。もう泣かないの綺麗な顔台無しよ。」

「姫えく大好きく」

「ちよつ! アンタまた鼻水つけてつ! もう…… (たまにはいいか。)」

「姫えく」

「何よ?」

「何でもなーい。えへへ♪」

「なら呼ぶなつつの。」

「カユちゃん、姫ちゃん! お風呂入るよ」

「はーく」

「双介&優飛サイド」

「追い出されちゃったな優飛」

「そうでござるな」

「なあ、そのござるもアレか？」

「拙者は昔からこうでござるよ」

「嘘つけ。さつき普通に喋べっただろ」

「良く聞こえたでござるな……今更元の口調に戻っても違和感でござるよ……」

「そうか……何で俺等外に追い出されたんだらうな。工房でもいいのに。」

別に工房でも良かったはずだ。

不思議でたまらない。

「姫殿の言った事でござるよ。拙者にもわからないでござる。」

「まあ、そうだよな。何時、中に入れるのか……ふう。」

「気長に待つしかござらん……呼びだしが怖いでござる」

「だな……どんな理不尽な事言われるかわからんしな。」

「……………双介氏は怒ってないでござるか？その……………」

「別に気にしてねえよ。友達にはかわらんしな。」

ただ、優飛がこんな姿になれるとは思ってなかったただけだ。」

「そうでござるか…」

「でも教師科もお前の事理解してるのか？」

「そうでござる。ランクも誤魔化してもらってでござる。」

「そうか……………なあ、優飛」

「何でござるっ？」

「肌寒いな」

「そうでござるな」

「こうして俺と優飛が中に入れたのは一時間半後だった。」

## 12話

「カユウの工房」

呼び出された後、俺と優飛は風呂にいれられリビングで寝かされた。布団を二つ用意されて俺達はすぐに睡眠にありつけた。  
疲れたな

「すう……………すうう……………いつてえ!？」

気持ち良く寝てたら誰かに蹴られた。

「ぐふう!？」

優飛も蹴られたらしい。

「早く起きろ！男子共！」

「んだよ……………げっ…有川」

「あ？何か文句ある？」

「いやっ何でもない！」

俺達を蹴った犯人はエプロンを着て髪を纏めてる有川だった。

エプロン……………なかなか。

「起きたなら布団畳め！邪魔！」

「ぐえっ!?」「ぐふうっ!？」

また蹴られた。

ご褒美になるとでも!？」

優飛ならともかく。

「拙者だって嫌でござる！」

心を読まれただと。

やるな優飛。

「何、訳わかんない事言ってるのよ！蹴るぞ。」

「もう！姫暴れないで！」

「はあ!?!アンタがコイツ等を起こせて言ったでしょ！」

「確かに言ったけど、普通に起こしなさいよ。」

エプロン姿のカユウが有川に小言を言う。

カユウのエプロン姿もなかなか……………。

胸の当たりが苦しそうに見えるのは俺だけか？

「拙者も思うでござる。」

また心を読まれただと!?

流石、優飛だ。

「え？何？…あつ……………また胸ばっか見て！お兄ちゃんと双介の変態！」

胸を手で隠しながらカユウが言った。

「拙者は見えないでござる！妹の胸如きで欲情するほど落ちぶれてござらん！」

「如きって何よ！お兄ちゃんの馬鹿！」

「ぐえ!？」

「おお、グーでいった。痛そう〜」

「私もグーでいこうか板倉？」

「はっはっは〜……………遠慮しとく！」

俺はすぐさま飛び上がり、言われた通り布団を畳み始めた。

「ほら！お兄ちゃんも早く畳んで！というかグーパンチくらいかわせたでしょ？」

「流石に妹がグーで殴るとは思ってたでござるよ。いてて。」

「え？ごめんお兄ちゃん。大丈夫？」

「大丈夫でござるく布団は何処に？」

布団を畳んだ優飛がカユウに聞く。

畳むの早くないか？

忍者すげえ。

「忍者は関係ないでござるよく拙者はいつも布団でござるからな。」

双介氏先に行くでござるよ。」

「おい！待てってー」

俺は優飛の後について行く。

「カユウサイド」

「もう、単純なんだから。さて、姫テーブルお願い。」

「ん」

あら？ちよつと姫拗ねてるわね。

双介に似合つてるとか言われたいのかしら。

「姫？」

「何よ？」

「エプロン、似合ってるわ。」

「は？何言つてんのよ。アンタは望海ちゃんの手伝いしてきなさいよ！」

「はーい」

機嫌良くなって良かったわ。

姫つたら可愛い。

料理をしている望海ちゃんの所に行かないと。

「望海ちゃん！お待たせ！ごめんね早くから！」

「あつカユちゃん！おはよう！大丈夫だよ慣れてるから！」

「そうなの？」

「うんそうだよ。いつもより遅いぐらいだし。」

「え!?!そんなに早くから準備してるの!?!」

「うん。そんなに驚かなくても。」

「望海ちゃんは疲れないの？任務とかあるのに？」

「全然だよ。」

望海ちゃんは本当に凄いわね。

毎朝早くに朝食も作ってAランクの任務もこなしているなんて。

「双ちゃん達起きた？」

「ええ、起きたわ。姫の蹴りで。」

「蹴りで!? 姫ちゃんつたらもう。」

望海ちゃんでもそういう反応するのね。

「それで何をしたら？」

「ならカユちゃんはツマを作ってくれる？」

「ええわかったわ……………ツマ？」

「うん! ちよつと豪華なお刺身定食！」

カユちゃん家のキッチン広くて奮発しちゃった!

「ええ!!! 魚裁いてたの? 家にはなかったのに!？」

「うん! 近くにお魚屋さんあったから買っちゃった!」

「おっお金払うから!」

「え? いらないよ。私が勝手に買ったただだよ。気にしないで!」

「いやいや! そんな訳には!」

「何、喚いてるのよ。」

「姫！だつて望海ちゃんが！」

「あつ姫ちゃんおはよう〜。」

「おはよう。それで？」

「望海ちゃんがお金いらないうつて言うのよ！こんなに沢山買って！」

「沢山？何を……………魚……………え？魚？うわ、鮭一匹まんま。」

「兎に角！望海ちゃん受けとつて！」

「ええ〜いらないうつ。姫ちゃん、お味噌汁はできてるからアワビの処理お願い。」

「えっうん。わかつた。」

姫も驚ろいてるし。

「カユちゃん、凄い！上手！」

「そうかしら？」

「私でもこんなに綺麗にツマは切れないよ！刀でならできると思うけど。」

「これ、ツツコミする場面？」

姫助けて！

「望海ちゃん、手止まつてるわ。新鮮なうちに処理しないと！」

「そうだね！ごめん！」

え？ええー？

姫？助けて船ないの？

何でやる気まんまんなの？

良く見たら魚生きてない？

待つて情報が多くてついていけない！

「のっ望海ちゃん？味噌汁の具って何かしら？」

「具？蟹の味噌汁だよ。」

蟹！

朝から蟹の味噌汁！

「カユウ、アンタも裁くの手伝いなさい。できるでしょ？」

「えっええ。裁けるわ。」

「なら、このイカやって。」

「ええ。どうしたら良い？」

「うーんとイカそうめんにしてもらおうかな。」

「わかったわ。」

本当に凄い新鮮なイカ！

今度目利き教えてもらおうかしら。

「望海ちゃんアワビ終わった。」

「ありがとう！ 姫ちゃんじゃ、次は……………」

順調に朝食作りが進んでいく。

「カユちゃん、鮭の切り身は冷凍庫にいられたから食べてね！」

「ありがとう望海ちゃん。それにしても豪華ね。」

「ふう……………よし。」

「姫ちゃんありがとう！ 二人のお蔭で早く終わったよ。」

「双介サイド」

「お腹空いたな、優飛」

「そうでござるな」

俺と優飛はリビングでのんびりテレビを

視聴している。

「いい匂いするな」

「そうでござるな〜」

キッチンからとてもお腹がすく匂いがする。

「まだかな〜」

「そうでござるな〜」

「二人共、お待たせ! ご飯できたよ!」

望海が声をかけてくれる。

「じゃーん! 凄いでしょ!」

望海が持つてきたのは……船盛!?

「デカくね? というか豪華!」

「おっおう」

「な……」

俺も優飛も驚きすぎてあまり声が出ない。

これを朝早くから作っていたのか。

「お皿並べるの手伝え、男子共。」

望海の後ろから有川が声をかけた。

「ああ。」

「承知でござる。」

有川に言われるがままお皿を並べる俺達。

「双介、お兄ちゃん、炊き込みご飯どのくらい食べる？」  
炊き込みご飯ときたか。

「大盛りで。」

「拙者も同じく。」

「わかったわ。」

「望海殿、今日は何かのお祝い事でござるか？」

「ん？普通の朝ご飯だよ」

「そっそっでござるか。」

わかるぞ、優飛。

俺も同じ気持ちだ。

「さて、食べましょうか」

カユウが席につく。

「いただきます」

「美味い！」

箸が止まらないぞ。

「もう、双ちゃんったらよく噛んでね。」

「この蟹の味噌汁も美味しいでござる！」

「望海ちゃん私に作り方教えて。」

「私も教えて欲しい！」

「いいよーって言っても簡単だよ？」

女子達は作り方で盛り上がっている。

対する男子達はひたすら食べる。

「ふう〜食った食った〜」

「い〜い〜」

朝からとても幸福だ。

こんなに美味しい朝食をみんなと

過ごせるなんて。

「今日はみんなこの後どうするの？」

カユウがみんなに聞く。

「拙者はここでのんびりするでござる〜」

「え!?!お兄ちゃん、居座る気!?!」

「駄目でござるか（・ω・）」

「だっだめじゃないけど。」

「うわキモ」

「姫え〜キモキモ言わないで欲しいでござる!」

「痩せた所でキモオタに変わりないから。」

「そんなマジレスしないでござる〜」

「ふん：。」

「俺は今日は家に帰ろうかな。」

「双ちゃん任務受けなくて大丈夫なの？単位とか。」

「大丈夫だ。望海は？」

「私はまだ用事あるから実家に帰るよ〜」

「そうか。そう言えばカユウお店は開けるのか？」

「う〜ん、まだ取引先の件とかあるからしばらく開けれないかも。お兄ちゃん何かしてくれるんでしょ?」

「拙者はのんびりと……睨まないで欲しいでござる。大丈夫でござるよその件は拙者にお任せあれ。」

「なら良かった。姫は？」

「……」

「姫？」

「姫ちゃん？どうしたの？」

「依頼がたつた今入った。」

「あら、良かったじゃない。」

「よくない！」

「どうして？姫ちゃん！」

「これを見て！」

〔一年強襲科 有川姫 依頼 一件〕

依頼内容：メイド喫茶の接客本日のみ。

「これはこれは……」

「(ぎ)る……」

「あー頑張れ！姫ちゃん！」

「あちやくフラグ回収したわね姫」

「何がフラグか！なんで私がこんなことしないといけないのよ！」

「まあまあ姫ちゃん。依頼主との時間までもうないから急いだ方がいいと思うよ。」

「……つち」

思いつきり舌打ちをする有川。

「姫、送っていくわ」

「……ありがと。今日もアンタの家に泊まるからお迎えよろ。」

「はいはい、わかったわ。それじゃ、姫送っていくから。望海ちゃんは大丈夫？」

「うん大丈夫だよお迎えがくるまでここにいるよ。」

「ん、それじゃ。アホ男子共来たら殺す」

物騒なことを言い残していくなよ。

【姫サイド】

「なんで私がこんな依頼しないといけないのよ」

「嫌なら断ればいいじゃないの。」

運転しながらカユウが言う。

「アンタ私が一件も断った事ないの知ってるのに言う？」

「なら文句言わないの。綺麗な顔台無しよ。」

「うっさい」

「にしても本当にメイド喫茶の接客をする事になるなんてね。できそう?」

「余裕。アンタが余計な事言わなければ来なかったかも知れないと思うと腹立つわ。」

「次はアイドルとかやったりしてw」

「殴るわよマジで。」

アイドルなんて絶対にやりたくないんですけど。

こないわよね?

「じゃ、姫終わったら教えてね。」

「ん。飛ばすなよ」

「はい」

さてと、やりますか。

めっちゃ面倒くさいけども。

依頼されたし可愛い服着れるからいいか。

面倒だな…板倉こないよね?

きたらどうしよう。

## 13話

「姫サイド」

うわ、キラキラフワフワしてて入りたくな。

私は恐る恐る入店した。

「すみません、本日依頼された有川です。」

店名はキラカワラグリーン。

ラグリーンか、センスな。

軽く調べたら人気店だった店名は気にしないのか。

「あつー！いらしゃいませ！来てくれてありがとうございます！私はここの店長の漣恋って言いませう！」

20代後半ぐらいの女性が挨拶をしてくれる。

「改めまして東京武偵高校1年の有川姫です。よろしくお願い致します。」

「姫ちゃん、素敵な名前！あつまずはずは詳しいお話をしたいから座って。」

言われる通り席に座る。

「まずは忙しいのに来てくれてありがとう！昨日突然辞めた子が多くて（・―・）」  
「そうなんですか。」

その顔文字みたいの何って思ったら負けかな。

「それで武偵さんは基本何でもやってくれるから。ダメもとで依頼してみたの！」  
「確かにそうですけど、なんで私に。」

「実はここでバイトしている子が武偵さんでね。有川さんが一番女の子のなかでも凄  
いって聞いて。」

「はあ。」

ここで武偵がバイトしているなんて情報なかったんですけど。

一体誰が。

《ピポーン！》

「あつー業者さんだ。ごめんね有川さんちよつと待つてて。」

「はい。」

人はよさそうね。

そもそも私も素人なんだけども本当にいいのだろうか。

もつと他に人選あっただろうに。

「それはこっちにお願ひします〜」

「よいしょここで大丈夫かな？」

ん？この声は

「ふう、おや？姫ちゃんかい？どうしてこんな所に？」

「パ、パパ!!」

「あつお姉ちゃんだ！」

「春樹まで!?!なんで？」

「あれ？あれ？あつそうか『有川商店』さんって同じ有川さんだったんだね！」

「そうなりますね。」

何という事だろう。

まさか、私の実家の『八百屋さん』がメイド喫茶に卸してるとは思いもしなかった。

「お姉ちゃん！お姉ちゃん！お仕事？」

「うっうん。そうだよくお仕事。」

ああ、もう愛おしくてたまんない。

この天使の名前は有川春樹。

小学4年生で私の可愛い弟。

見ているだけで癒される。

お持ち帰りしたら駄目かな。

「そうか姫ちゃんお仕事か無理しないでね。」

この人は有川昌。

私が幼い頃にママと再婚した義理のお父さんだ。

主に野菜の配達を担当している。

「うん、パパも無理しないでね。お酒飲みすぎたら駄目だからね。ママによろしく。」

「大丈夫だよこのくらい。ハハ気を付けるよ。うん伝えとくたまには帰ってくるんだよ。それじゃ、また。春樹行くよ。」

「うん！お姉ちゃんまたね！」

「またね〜」

もうだめ可愛い。

「お疲れ様です〜。それで依頼の方なんだけども」

「やります！完璧にこなします。」

「本当?!良かった〜。それじゃ、まず……」

私は一通り接客の仕方を教えてもらった。

このこのメイド喫茶はフードに力を入れているらしく比較的安価で食べることができて種類も豊富だ。

なんでメイド喫茶でやろうとしたのだろうか。

「とまあ、こんな感じですよ。どう？できそう？」

「はい、問題ないです。人数は私達だけですか？」

「えつとあと一人くるよ！」

「おはようございます〜：うわマジか。」

「は？なんでアンタがここに？」

「おろおろ？お知り合いだったの？」

「ええまあ。」

「……」

コイツか武偵でバイトしているのって。

「なんでアンタが」

「それはこっちの台詞よ。」

「もう、〃咲良ちゃん〃喧嘩はつめ！だぞ！」

「喧嘩じゃないですよ店長。挨拶です。」

「……………」

「何よ有川。文句ある？」

「別に」

一応説明しておくところの女の名は

浅野咲良、同じ武偵高の1年でクラスはC組の委員長。情報科でBランク。ことあるごとに私に突っかかってくる女。

「制服についてなんだけど、ロングスカートとハーフスカートどっちにする？銃は見えなくても大丈夫だよ！」

「ロングスカートでお願いします。」

パンツとか覗かれたら嫌だし。

「もしかして有川、日和った？」

「は？日和ってないし！ハーフスカートでお願いします！」

「ハーフスカート？わかったよちよつと待っててね！」

漣さんは更衣室に入ってしまった。

「浅野一体どういうつもりよ、漣さんに私を紹介なんてして！」

「活躍している1年の女子を聞かれたから正直に言っただけだし！まさか有川に依頼するなんて思ってもなかったわよ！」

「仲いいね〜」

「よくない！」「よくないです！」

なんでコイツとはもるのよ。

「はい、有川さん……姫ちゃんってよんでもいい？」

「大丈夫です。着替えてきます。」

私は更衣室に向かった。

なるほどこういう構造ね。

渡された服は通気性がよく可愛いデザインだ。

サイズもピッタリ。

銃も忘れずに携帯しておかないと。

「着替えました。」

「凄い似合ってるよ！ 姫ちゃん！ お胸大きくて羨ましいね沙良ちゃん！」

「たっただの脂肪ですよ！ いうて店長は小さくないじゃないですか！」

「ええ〜そうかな〜」

漣さんは自分の胸を確認しながら言った。

「つく……………」

浅野は悔しいでしょうねえ。

「何よ！ 有川！」

「別に肩凝らなくてよさそうだなって思っただけよ。」

「こんの……………」

「咲良ちゃんもうオープンするから着替えてきて〜」

「はい、わかりましたよ。」

浅野はしぶしぶ更衣室に行った。

ふん、ざまあ。

【咲良サイド】

「別に良いじゃないの大きくなって。」

有川の奴、勝ち誇った顔してムカつく。

Cカップで何が悪い篠原さんに言いつけるぞ。

あんなのただの脂肪なんだから！

ね！篠原さん！

「はつくしよん！」

「風邪？望海ちゃん？」

「誰か噂しているのかな。あつお迎えきたから行くね！」

「はーい気を付けてね。」

いけないいけない早く着替えないと！

「でもまあ、有川がいれば安心ね。」

一時はどうなるかとおもったけどこれで一安心、頼りにしているわよAランクさん。

【姫サイド】

「店長くお待たせしました。」

「うん！今日の沙良ちゃんも可愛い！あとはよろしくね！」

「はい、わかりました。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何よ有川」

「・・・・・・・・・・・・・・・・さまになっているのね。」

「そりやどうも。店長は今日は厨房だから私と有川が接客なんだけどできるの？」

「私を誰だと思っているのよ。」

「はいはい、Aランク武偵さんだったわね。」

「一つ質問」

「何よ?」

「なんでアンタはロングスカートなのよ！」

「ロングが好きだからよ!.....はあ、オープンするわよ準備はいい?」  
「ん」

「だから、んは返事じゃないでしょ、ったく」

浅野はお店の看板をオープンにし、店内BGMを流す。

「しつかり頼むわよ、Aランクさん」

「言われなくても」

「お客様がお見えになるわ、いい?」

「お帰りなさいませ!ご主人様!」

「いっちょよ、やりますか。」

「店長!ふわふわオムライス入ります!」

「漣さん!モリモリチャーハンお願いします!」

「はくい少し待っててね!」

普通に忙しいぞこのお店。

「すみません注文いいですか」

「はい、有川あちらのご主人様お願い」

「ん」

「アンタはまた、んって言って」

浅野がとやかく言っているがいつもの事か。

「お待たせいたしましたご主人様！」

「お？新人さんかい？」

「1日体験なんです〜」

私は笑顔で答える。

「そうなんだ後でチエキお願い、それと地獄ドリンクお願い。」

「かしこまりました！ご主人様！浅野さん地獄ドリンクお願い致します。」

「……わかりました！」

浅野が一旦フリーズした。

何よ私だつてアンタにこんな声色で話したくないわよ。

「姬ちゃん、咲良ちゃんお料理お願い〜」

漣さんが厨房から声をかける。

「有川さん、ふわふわオムライスお願い。」

「……………お待たせ致しました！ふわふわオムライスです〜」

「君可愛いね〜新人？」

「はい！1日体験メイドなんです〜。ご主人様絵は何書きますか？」

「う〜んそれじゃ、大好きって書いてもらおうかな。」

「は〜い」

私は心がこもってない大好きの文字をケチャップで書く。

「ありがとう〜」

「いえいえ〜ごゆつくりお休みください〜」

顔に出てないよね少し心配。

「それ？本物？」

「きや!?!お触りは厳禁ですよ!ご主人様!」

っち、八倒すぞおっさん。

「ハハ、ごめんよ。」

「私、武偵なので本物ですよ〜」

「咲良ちゃんと同じ?」

「はい!同じ1年なんです〜」

「咲良ちゃん学校ではどんな感じ?」

「そうですね〜はきはきとしてて人気者なんですよ〜私尊敬しちゃう!」

「へえ〜そうなんだ」

興味ないのなら聞くな。

「……………(何よ浅野文句ある?)」

「有川さん、次の料理お願い（いや少し気持ち悪いなど。）」  
「わかりました（は？撃つわよ）」

「お願いね（だってアンタがあんな事言うなんてね）」

「は〜い（言っておくけど本心じゃないから）」

「はいはい」

声出したらアイコンタクトの意味なくなるだろ。

「ふう、ひとまずピークは過ぎたね。 姫ちゃん、咲良ちゃん」

「そうですね〜流石に疲れました。」

「……………ふう」

さつきまで忙しかったのに今はがら空きだ。

ずっと居座る客がないのは意外だ。

「姫ちゃん、すごいね！流石、Aランク武偵さん！」

「別に普通です。」

「やるじゃん有川」

「アンタはもう少し愛想よくしたら？忙しくてもさ。」

「は？してますけど！」

「こちら喧嘩はつめ！だぞ。」

「してないー！」

「仲いいんだからー」

「よくないですよ店長」

「お腹空いた……」

「少し休憩しようか！……お帰りなさいませ！ご主人様！」

「お帰りなさいませ！ご主人様！」

休憩しようとしてるときに。

「3人なんですけど空いています？」

「あら、リンさんお帰りなさいませ。」

は？カユウ。

それにキモオタと……板倉！

「いつてらつしやいませ！お嬢様！ご主人様！」

「え！？！姫ちゃん駄目だよ来たばかりなのに！」

「あら私つたらごめんなさい漣さん。ご案内致しますね！」

3人を席に案内する。

「ご注文はお水でいいですか？」

「まだ頼んでないでござるよ姫え」

「……………何しにきた冷やかしか？」

「有川、似合ってるぞ」

「姫、可愛い！」

「殺す」

「ちよつとお店で物騒な事言うなし有川。」

「……………」

「黙るなし！はろはろ、板倉君、リンさん、それに……………竜胆君だよね？」

「ちちち違うでござるよ！」

「戸惑い過ぎだぞ優飛」

「？せたらめつちやイケメンだったんだ。意外」

「だって良かったわねお兄ちゃん……………あ」

「お兄ちゃん？へえくなるほどなるほど。私の情報はあつてたか。」

「え!?知つてたの？浅野さん？」

「まあ、なんとなくね〜深いことは聞かないわ。ご注文は何にする？」

「俺はふわふわオムライスで」

「私はキラメキパフエで！」

「拙者は〜」

「いつものでしょ？」

「ござる」

「いつものつていつもきてるの？お兄ちゃん？」

「まあそうなるでござるな」

「汗大丈夫か？優飛？」

「問題ござらん！」

「ご注文ありがとうございます！お嬢様、ご主人様！ほら有川！」

「ありがとうございます♪楽しみに待っててね♪」

「姫、顔引きつってるわよ」

「ええ〜そうですか〜姫わかんない〜」

絶対後で締めてやる！

「有川、ほらパフエ作るわよ」

「はーい♪」

【双介サイド】

「なあ、やつぱりやめたほうが良かったんじゃないか？有川のあんな声初めて聴いたぞ」  
「私もよ双介。それにしても姫似合ってるわね〜」

「そうだな。後が怖いけどな。」

「まあ、いいじゃないの。こんな姫中々見れないんだし。」

「だな。優飛？本当に大丈夫か？」

「だっだ大丈夫でござるよ何でもござらん！」

「顔色悪いわよ、お兄ちゃん。」

「気の精霊さんでござる」

【姫サイド】

「絶対に殺す」

「有川、声に漏れる」

「うっさい知ってるわよ。」

「なんで来たのよあの3人！

来るなっていったのに。」

「ふわふわオムライスできたよ」

「はい！ほら有川持って行って。私はパフェ持っていくから。」

「………ん」

「ほんとそれ、返事なのアンの。」

「お待たせいたしました！キラメキパフェです！」

「ありがとうございます。」

「お待たせいたしました！ふわふわオムライスです♪絵は何を書きますか？」

「お任せで」

「わかりました♪」

私はケチャップで文字を書く

「有川その………すまん」

「え？何がですか？ご主人様♪」

「有川くアンタ何でご主人様に殺って書くのよ！」

「お任せって言われたので」

腹の虫が収まらない。

板倉、アンタは締め落とすからな。

「はあくお待たせいたしました！竜胆お兄ちゃん！妹愛情ケーキです！」  
「は？妹愛情？」

「キモ」

カユウと私がほぼ同時に反応する。

「こここここれはその！ただのケーキでござるよ！」

「どうしたの？竜胆お兄ちゃん？ほらあーん」

「あーん」

浅野がキモオタにあーんをしている。

「美味しい？竜胆お兄ちゃん！」

「お美味しいでござるくははははは」

「お兄ちゃんねえくへえく」

「カユウ!?これはその誤解というかそのでござるよ！」

「べつつにくお会計お兄ちゃんがしてくるんでしょ？」

「え!?!でも奢ってくれるって………承知でござる。」

キモオタはカユウの気迫に負けた。

ぞまあみろ。

「竜胆お兄ちゃんもうケーキいらないの？」

「浅野殿、もう勘弁してほしいでござる」

「あつはは。ごめんね！面白くて。リンさん大丈夫だいつもはあーんしないから。」  
「別に気にしてないわ。」

「？つけ拗ねてる顔のくせに。」

「なんだかんだ言つてキモオタの事

好きなのね。」

「いい兄弟じゃない。」

「キモオタの焦っている顔見て少しはマシになった。」

「美味しいなこのオムライス」

「板倉アンタはよく食えるな。」

「殺つて書いてあるオムライス。」

「みんな武偵さんなの〜？」

「あ、店長。そうですよ。」

「そうなんだ！姫ちゃんのメイド服可愛いよね！」

「はい！可愛いです！私も着てみたい！」

「本当に!?!でもサイズあるかな〜」

「ああ〜大きいからか。そうだったリンさんは向こう側の人間か」

「浅野さん？向こう側って？」

「乳デカ連盟」

「ええ〜」

カユウが困った顔をしている。

「負け惜しみは見苦しいわよ浅野」

「はあ!?誰が！」

「こーら！ご主人様達の前で喧嘩はめ！」

「すみません」

浅野のせいで漣さんに怒られた。

「板倉鼻の下伸ばすな」

「は？してねえよ！」

「姬ちゃん！ご主人様にそんな口聞いたらめ！」

「はーいごめんなさい」

っち怒られた。

他愛のない会話が進んでいった。

「ふう、楽しかった！ご馳走様お兄ちゃん」

「すまんな優飛」

「大丈夫でござるこのくらい……」

「また来てね竜胆お兄ちゃん！」

「あ浅野殿！」

「ごめんごめんw」

浅野がキモオタに絡んでいると

《バン！》

入り口が勢い良く開き、複数人男性が入店する。

「漣さん！まだこんなちなちな店で営業してたのですか？そろそろ私の所で働きなさい。」

太った男が漣さんの腕を掴み引き寄せた。

「きや!?やめてください！その話は前に断ったはずです！近藤さん！」

「生意気な口を聞いていいんですか。」

「みんな！逃げて！私は大丈夫だから！」

「おや！よく見れば可愛い子がいるじゃないですか！おい連れてこい」

「へい兄貴」

男の1人がカユウに向かって接近する。

「これ以上近づいたらただじゃすまんでござるよ」

キモオタがカユウの前に立ち、言い放った。

「はあ？ただのガキが何言ってるんだ！」

「つふ！」

「ぐあ!？」

キモオタが近くにあつた飴を男の目にめがけて投げた。

「ねえ、おっさんそろそろ漣さんを離してくれない？私の大事な人なんだけど？」

「おっさん!?この私におっさんだとお！おいお前等懲らしめて私の元に連れてこい！」

「な！待て！つち」

くそ漣さんが連れていかれた。

ざつと20人ぐらいかどうするか。

「姫！私達は大丈夫だから！店長さんをお願い！」

「カユウでも！」

「有川大丈夫だ素人集団なんて俺達にかかれば余裕だ」

「Eランクのくせにいつちよ前に。はあ・・・任せた！私は漣さんを追う！」

まあ、これも板倉の成長に繋がるからいいか。

「有川！アンタ一人で行く気？」

「そうだけど！せい！」

向かってきた男を蹴り上げる。

「連れていかれた場所なら心当たりある！私も行く！」

「あつそうアンタ、ついてこれんの？」

「当たり前！これでもBランクなので！」

「板倉！カユウ！キモオタ！お店の残党まかせた！」

「行くぞお前等！ただのガキだ！」

「……お——！……」

「そんじゃ！お願いね3人とも！」

私と浅野は入り口を突破し、外に出る。

【双介サイド】

「なあ、優飛競争するか？」

「拙者の圧勝でござるよ？」

「言つてろ！器物破損及び」

「誘拐の容疑で！」

「貴方達を逮捕します！お願い、

お兄ちゃん、双介！」

「カユウは更衣室に！」

「ええ、わかつたわお兄ちゃん！」

カユウが更衣室に入ったのを確認すると優飛は更衣室の前に瞬間移動する。

「な!?コイツ何者だ！」

「拙者はただの武偵でござる・・・よ！」

パイプ椅子で男Cをけん制する。

「くそー!これなら！」

男Dは拳銃を取り出す。

「双介氏!この勝負拙者の勝ちでござる！」

「つぶどっかな！」

俺はベビーイーグルを取り出し構える。

男がうじゃうじゃと鬱陶しいからさっさと終わりにするか。

「ここは癒しの場だぞ?おっさんなんてお呼びじゃないんだよ！」

【姫サイド】

「有川！後ろ乗って！」

浅野がバイクに乗って言う。

「アンタ免許持ってたっけ？」

「待ってます！ほら早くメット被って！」

「はいはい」

「それじゃ飛ばすわ！」

「マジ」

どうして私の周りはこちらも飛ばしたがるのか。

メイド服のまま出てきたから結構周りの目が集まるわね。

ニュースとかになつてたら嫌だな。

「そんで漣さんが連れていかれた所はどこ？」

「新しくできたメイド喫茶よ！昨日辞めた子も引き抜きにあつてね。それに違法に営業しているみたいなの」

「なんで警察は動かないのよ！」

「証拠がないからよ！私はある程度情報が持ってたからしってるだけ！」

「なら早く捕まえたらいじやない！」

「それができたらしってるわよ！でもこうしてのこのこと来てくれたから！チャンスって訳！アンタもいるしね！」

「あつそう！寒いんだけど！」

「知らないわよ！アンタがハーフスカートにしたのが悪いんでしょ！」

「アンタが言うなし！」

「なによ！」

バイクはみるみるスピードが出てあつという間に目的地に着いた。

「行くわよ！有川！」

浅野はロングスカートからグロック19を取り出す。

「指図すんなし！」

私は太もものホルスターからグロック18Cを取り出し新しくできたというメイド喫茶の中に入った。

「武偵よ！大人しくお縄につきなさい！」

「手下共はどうした！」

「たぶんくたばってるわ。」

「姫ちゃん、咲良ちゃんどうして……」

服が引き裂かれてる漣さんが言う。

くそ外道がなんでこうもこんな人間ばかりいるのか。

「漣さんは私の依頼者ですから。すみません、漣さんを危険な目に合わせて武偵失格です。ね。」

「Aランクが一人いなくなるかゝ残念」

「ちやちやを入れるな浅野」

「はいはい。店長私達は武偵です。ですので依頼してください。私を助けてと。」

「何をごちやごちやと！お前等やれ！」

黒服の男がぞろぞろと現れた。

「ごちやごちやなのはアンタ等クズ共よ！漣さんお願いします！」

「………姫ちゃん、咲良ちゃん！私を助けて！」

「かしこまりました！メイド長！」

「器物破損及び」「誘拐の容疑で」

「アンタ等を逮捕する！」

「浅野！」「はいはい」

浅野は黒服の男達の相手をする。

【咲良サイド】

「さーてお掃除のお時間ですよ〜」

店長、ごめんなさい。

私がおもつとはやく行動に移せたのならこんな目に合わせずに済んだのに。

私がAランク武偵ならすぐできたのに！

「失せろ！雑菌共！」

《ダアン！ダアン！ダアン！》

私はグロックを照明めがけて発砲した。

暗くなったからやりやすい。

「このー！」

黒服Aがナイフを持って突っ込んでくる。

「邪魔なのよー！」

スルリと躲し、首元をグロックで殴る。

「纏まってかかかってきなさい！お掃除するからー！」

「なんだとー！」「このガキ！」「やっちまうぞー！」

安い挑発にのって来て良かった。

「3, 2, 1ドカーンってね」

閃光弾を私の足元に落とす。

黒服の男達はまんまと引っかかる。

「それでも黒服？情けないわね！」

私は次から次へと黒服の首筋を強くグロックで殴り無力化をしていく。

「はい、お掃除完了」

後は任せたわよ姫！

【姫サイド】

「今なら怪我をしないで済むけどどうする？おっさん？」

グロックを構えながら近藤と呼ばれていたおっさんに接近する。

「こつこのアマ！また私をおっさんと言いやがって！これ以上きたらこの女の命はないぞー！」

「きや!?!」

「きや!?!」

近くにあったナイフを漣さんに突きつけた。

「これ以上罪を重ねて………はあ〜」

「馬鹿にしやがって！どうなってもいいのか」

「おっさん、私が撃つのとナイフで刺すのどっちが速いと思う？」

「ナイフに決まって」

《パン！パン！》

「うわあ!？」

私はナイフめがけて一発、足元目掛けて一発撃った。

怯んだ隙に詰め寄り漣さんを救出する。

「ありがとう姫ちゃん。」

「遅くなってすみません。浅野!」

「はいはい。店長こちらです!」

浅野を呼び漣さんを近藤から距離を取らせた。

「つくくそお!覚えてろ!」

私達に背を向け情けなく走る。

「逃がすか!」

私は全力で走り後ろ姿の近藤目がけてラリアット。

「ぎよえ!」

「大人しくしろ豚が！」

転がった近藤に関節を決める。

「痛い痛い痛い！」

「そのまま寝てろ！」

「ぐふえ………」

落ちたか。

「ふう。これにて終了。浅野！」

「もう警察呼んでる、というか自分で呼びなさいよ！」

「うっさいBランク」

「ふん。漣さん、他に何かされてませんか？」

「姫ちゃん達がすぐきてくれたから服を切り裂かれただけで済んだよ。あつでも少し口で」

「大丈夫です！言わなくて！」

「店長なんで平気そうなんですか？」

「昔ちよつとそういうお店で」

「そうなんですか!?!知らなかった。」

「えへへ」

えへへって。

人それぞれ色々あるから深くは聞けないか。

「とりあえずこれを。」

私はバスタオルを漣さんにかけてあげた。

メイド喫茶にバスタオルなんて何に使うんだが。

「にしても、メイド喫茶じゃないわね。シャワー室なんてあるし風俗店じゃないこんな  
雰囲気」

「アンタ行った事あるの？」

「ないわよ！」

「もう、すぐ喧嘩する〜」

「してない!」「してないです!」

なんてやりとりしていると警察がきて近藤達を回収していった。

【キラカワラグーン】

板倉から連絡がきて片付け終わったみたいなので私達はお店に行った。

「有川、お疲れさん」

「ん」

「アンタはまたそういう返事を」

「で？なんでキモオタと板倉は正座してるわけ？」

「気にしなくていいわ姫」

「あっそう」

気になるけどどうせくだらない事か。

今回の件、望海ちゃんがいなくて良かった。

怪我人多数になってたと思うし。

「皆、ありがとうねお店守ってくれて」

「仲間を信じ仲間を助けよ。このくらい普通よ浅野さん」

「そうだね。あと浅野さんっていうより咲良ってよんで私もカユウって呼ぶから。」

「わかったわ咲良」

「そんじゃ、私と有川は報告しないといけないからこれで。またね竜胆お兄ちゃん！」

「あ浅野殿！」

「さて私達も帰りますか行くわよ双介、お兄ちゃん」

「あ、板倉」

「なんだ有川」

「私のメイド服姿見たから今度締めるから。」

「なんでだよ！」

「アンタが一番見てたから！あと浅野の胸と比べた！」

「え!?! そうなの？板倉君」

「双介、最低ね」

「なんでこうなるんだよ」

「南無でござる」

「キモオタアンタもな。」

「いざいざ!?!」

メイド喫茶来た罰だったの。

ばーか。